

---

# 株式会社 黒獅堂

黒雛 桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

株式会社 黒獅堂

### 【Nコード】

N4335E

### 【作者名】

黒雛 桜

### 【あらすじ】

ある世界のある場所のある会社の物語。

## プロローグ

それは、世界のどこかに存在している。

それは、世界のどこかで求められている。

望むものだけがそれを知ることができる。

『弊社はどのようなご依頼も承ります』

ある者が言うには、そこは有名企業が名を連ねるビル群に紛れて建っているという。

どこにでも見かけるねずみ色の外観は、およそ無人の雑居ビルと言われても不思議ではないとのこと。見上げればせいぜい三、四階ほどの小さな背丈。

看板一つも掲げていないそのビル。

恐る恐る近づくと、少し滑りの悪い音と共に、ゆっくり開く自動ドア。

外からでは想像もつかないほど中は広く、そしてまばゆい光が溢れているようだ。

一階ロビーの床は、ダウンライトで輝きを増す、つややかな大理石。

壁は、汚れ・傷一つ見当たらない純白。

ゴシック調に揃えられた黒のロビーチェアとテーブル。

極めつけは、入り口正面に備わった受付カウンター。  
エントランス

一人の女性社員が出迎える。

アンティークドール  
人形かと思紛う程の美貌を備えた、金髪碧眼の受付嬢。

あつという間に心を奪われ、足は自然と前へ進んでゆくらしい。  
そして、スーツ姿の男性社員がどこからともなく現れ、静かに尋ねるのだ。

『いらつしやいませ、お客様。 本日はどのようなご依頼で？』

落ち着き払った、低い声。

柔和の中にもどこか鋭く、強い響き。

魔法にかかったように自分の口が動き出す。

スーツの男に望みの全てを語り、心の中にあつた靄<sup>もや</sup>を払う、払う。

ずらりと活字を並べられた契約書にサインを記し、事が廻りだす。  
前払いである依頼金を支払い、自分の役目は終るのだ。

あとは、“エージェント”に任せるのみ。

麗しき受付嬢に見送られ、再び自動ドアを通って、日常の雑踏に戻るそうだ。

後日、電話が鳴り、通話ボタンを押すと聞き覚えのある男性の低い声。

『依頼は無事果たされた』とのこと。

あまりにも不思議で奇妙なそのビルへ再度足を運ぼうにも、ビル群の中にあるはずのそこが見つからない。

看板のないそのビルは、再び見ることが叶わないそうだ。

今日もどこかで、誰かが、依頼をする。

『いらつしゃいませ、弊社はどのような依頼も承る、優良企業でございます』

ねずみ色ビルの最上階、社長室のプレートを掲げられた一室。

机と椅子、本棚以外のインテリアを排除した殺風景な内装。

背面を向けていた黒い革張りの椅子がキィと音を立てて回転する。

そこには大きな椅子に似合わぬ、ダークスーツに身を包んだ、十

二、三歳の少年が座っている。

耳くらいで綺麗に切りそろえられた黒髪。

子供にしては物憂いげな黒瞳。

細く、小さな両手を組み合わせ、口元をふっと緩めるさまは、統率者に相応しい品格が満ちている。

社長は言う。

『ようこそ、黒獅堂へ』

世界のどこかに存在する、優良企業。  
その名は

株式会社 黒獅堂

## 1章 CHARTREUX【I】

ようこそ、株式会社 黒獅堂へ。

弊社はどんなご依頼も承る優良企業でございます

南天に高く昇る太陽。

地面を焦がすほど、その光は殺人的な熱量を地上に降り注いでいる。

大地に生える雑草は水分を失い、とつくに枯れて死に絶えていた。赤茶けてひび割れた、殺風景な荒野が延々と続いているのだ。

「暑い……」

喉の奥から絞り出した声は、今にも生気を失いそうな声で。

深海色の左眼は暑さで濁っているのだろうか？ 虚ろに正面を見据えている。右眼を覆う黒い眼帯が、空から注がれる光線をモロに吸収し、暑さは倍増。

熱風に金色の髪を揺らしながら、少女は炎天下の荒野をのろのろ歩く。隣には暑さを微塵も感じさせぬ、飄々とした足取りの、犬が一頭。

「暑い、暑い……！」

身にまとう黒い外套から蒸気が出ていることには気付いていないようだ。

いつそ外套を脱ぎ捨ててしまえばサウナ状態は免れるのだろうか、白い肌が焼けて真っ赤になるのは目に見えていた。

「ああもつ。5日も歩きっぱなしじゃん……いつになったら目的の町に着くのおー……」

金髪のショートカットを奇立たしげにくしゃっとかき上げる。

「仕方ないでしょう?」

落ち着いた、紳士的な声が少女へ向けられた。

隣でぴたりと並んで歩く、一頭のドーベルマンがごく自然に語りかけたのだ。

「シャル、貴女が転送装置の座標を誤って押したのだから、文句言っってはなりません」

ぴしゃりと正論を突きつけられ、少女　シャルはぐっと押し黙った。

不満げに頬をぷうと膨らませ、負け惜しみの文句を一つ呟く。

「……社長の命令じゃなかったら、こんな辺鄙なトコ、お断りよ。しかも監視付きなんて。だいたい、こんなバイト君がするような仕事、あたしの担当じゃないんだからね」

「これもエージェントの仕事の一つです。わたしだって、社長の指示で仕事をしているんですよ、“監視”という名の仕事をね」

人語を操るドーベルマンは、口元に人間じみた笑みを浮かべている。

いちいちム力つくやつだ。内心そんな事を考えながら、シャルはうなだれる暑さの中、任務先の町へ向かう。

土埃を全身に被り、汗だくになりながら荒野に行く様は、美貌の

顔立ちを見事に崩していた。

それでもなお、歩みを止めることは　　ない。

### 3 時間後

灼熱の太陽はほんの少し角度を変えて空に浮かんでいたが、相変わらずの光を放っている。

シャルは朦朧とする視界の中、ぼんやり揺れる建物らしき影を見つけた。

地表の熱で遠くに見えるその影はゆらゆら歪んでいたが、蜃気楼や幻などではなさそうだ。

「やった！　やっと水和気町ミスワキチョウが見えた！！」

目を輝かせて、汗だくの顔をほころばせるシャル。

今までガタ落ちだったテンションは一気に上がり、90度に折れ曲がった腰が垂直に跳ね上がった。

足先に神経を集中させ、赤茶けた地面を思い切り蹴り上げると、少女は目を疑う速さで駆けて行く。

先程まで力なく足を引きずるように歩いていたとは思えない、見事な立ち直りである。

「こら、待ちなさい、シャル……」

監視犬を気にすることなく、一気に加速。

まるで、飛ぶように走る。

「やれやれ、協調性のないエージェントだ……」



置いてけぼりにされたドーベルマンは小さくぼやくと、シャルが走り去って行った方角を見つめる。

ふう、と短くため息を吐き、細く筋肉質な前脚を踏み出すと軽やかに駆け出した。

水和気町と呼ばれる荒野にぽつんと存在する町。

年中灼熱の光が注がれる大地に佇む、小さな小さな町は、なぜか熱中症の類で人が倒れたという被害はない。

周囲全体に熱を通さぬバリアが張られているとか、水神の加護があるからとか、どれも信憑性に欠ける噂話があるのだ。

誰一人真実は解らず、水和気町は世界七大不思議の一つである。

そして、ここには地下水源を利用した、噴水が一つ存在している。この噴水こそが、町を潤す重要な財源となっていた。

けして枯れることのない、地下から絶え間なく溢れ出る、奇蹟の水。

それは、世界中に認められる最高級の天然水となる　そんな噂の絶えぬ不思議な水和気町。

“ ようこそ水和気町へ ”

高々と掲げられた看板をくぐって、涼しげな気候の町へ足を踏み入れる一頭の犬。

看板を境に、別世界に踏み込んだと錯覚するほど温度が激変した。

「シャル、勝手な行動は慎みたまえ。わたしは無駄に走るのが嫌な

んです」

ドーベルマンは、町の入り口を少し進んだ先に、背を向けて佇立する少女へ小言を投げかけた。

「ねえ、ドンちゃん。町にヘンな怪獣がいるんだけど」

「それは」

背を向けたまま、シャルが棒読みで眼前の状況を説明すると、犬はさして驚く様子もなく、まるで知っていた風な口振りで切り返し、一呼吸おく。

シャルの横に駆け寄り、目線を辺りに走らせる。

ふと、視界に飛び込んできたソレを見た瞬間、あんぐり開いた口から犬歯が覗く。

アーモンド形の目がカアツと見開かれた。

「な、なっ?! あんなに巨大なヤツだとは……」

続く言葉に何を言おうとしたのか?

それ以上は口をつぐむ犬。

一人と一頭の目の前を、けたたましい咆哮をあげながら、巨大な影が通り過ぎる。

だすんだすん、と地面を揺らしながら、それは竜巻のように木造の家屋を破砕して突き進んでいった。

「ね、怪獣いたっしょ?」

## CHARTREUX【II】

目線を正面に向けたまま、シャルがまたもや棒読みで呟く。

確かに、エリマキトカゲのような姿の、二足歩行で駆け抜ける巨大な生物　怪獣が目の前を横切った。口から放射線でも吐き出しそうな大口を開け、町民を追い掛け回しているのだ。

町の四方八方で老若男女が悲鳴を上げ、逃げまどっている。

突然。

呆然と立っていたシャルの外套を何者かが掴みかかってきた

首元の大きなボタン一つで留められている、黒い外套。

何者かに腹部付近の生地をぐいと掴まれ、シャルは不意打ちをくらひ、体勢を崩してしまった。

一体なに？

目線を下に向けると、初老のふくよかな女性が必死の形相を浮かべ、膝をついてがっしりシャルを捕らえている。

「旅の方ですか？！　た、助けてください！　荒野から流れてきた怪獣が町を破壊しようとしているんです！　5日前から、追い払おうと手を尽くしてきたのですが……ついに暴れだしてどうにもならないのです！　どうか……！！」

カブトムシ並にしがみ付かれ、断るにも断れない状況だ。

への字の眉と、半分まで下がってしまった左のまぶたが、めんどくさいというオーラを出していた。

が、間髪入れず返答があがる。

「わかりました、そのご依頼、承りましょう。弊社のエージェント

は優秀ですよ」

紳士的な物腰で、一步前へ踏み出たドーベルマンが快諾したのだ。何度も何度も頭を下げる女性を見つめて、満足げに耳がピクピク動いているのを、シャルは苦虫を噛み砕いたような表情で見つめている。

快く承っちゃったみたいだけど、実際怪獣と戦うのって、アタシなんですけど……

頬に空気を溜め、片眉をつり上げた仏頂面を浮かべ、シャルは心の中でばやいた。

土埃の舞う、水和気町。

普段は賑やかで平和な町が、今や恐怖で支配されている。

絶叫。

怒号。

咆哮。

原因は一匹の怪獣。見た目はいまひとつ迫力に欠けるエリマキトカゲのような姿だが、でかさが違う。

平屋が建ち並ぶ町から頭一個分、によきつと飛び出る巨体。

町民は対抗する術を知らず、逃げまどうのみ。

町から一步外へ踏み出せば、たちまち炎天の陽射しに皮膚を焦がされるだろう。

「チエツ、こんなしょばい仕事させないでよね、ドンちゃん」

土埃の舞う、水和気町入り口の前。

黒い外套をたなびかせ、金髪の眼帯少女は気だるい声でぽつりと呟いた。

「わが社はどんな依頼も承る優良企業。社長の方針ですから……さあ、サクサク働いてください。シャル」

「はいはいはい」

「『ハイ』は一回」

「……」

後脚で首の横を掻きながら犬は、人間に働け。と指示を出す傍から見れば、異常な光景だろう。が、しかしこの町の人々は自分たちの事で手一杯で、一人と一頭の実在に気付いてもいない。

シャルは首元で留めていた外套のボタンを一つ外し、黒いそれをばさりと地面に投げ捨てる。

外套の下は動きやすそうなタートルネックの黒いノースリーブ。カーキのショートパンツ、ダークブラックスのロングブーツを完璧なまでに穿きこなしていた。

スタイルの良さは上から羽織っていた黒い外套で見事に隠されていたが。

腰のベルトに吊るされた大小二振りの和刀。

シャルはちらりと目線を腰に向けたが、少し思い止まり、武器を手にとらず、破壊音が聞こえる町の中心へ歩き出す。

程なく歩くと、水が絶え間なく噴き出る噴水広場にたどり着くシャル。

そこには問題の怪獣が奇声を上げて、噴水を守ろうと立ちはだかる町民に威嚇しているではないか。

「げっ、やばくない？」

シャルは眉をぴくりとあげて、思わぬ光景に焦りの色を見せた。そう、怪獣に噴水を破壊されるわけにはいかないのだ。

先程までの気だるい表情から一変、キツと鋭い視線を左眼が放つ。地面に落ちていた腕の長さほどの木の枝。それをひょいと掴み上げ、ぶん、と正眼に構える。

「ねえ、エリマキゴジラ。おとなしく町から出て行けば、手加減したげるよ？」

警告を兼ねて、不意打ちにならぬよう存在を知らせる。

が、シャルに気付いたのは当の怪獣ではなく、両手を広げて必死に噴水を守る4〜5人ほどの町民達だけだ。

彼らは目を丸くして、木の枝を構える少女を見つめた。

シャルは怪獣が完全無視を決め込んだことに少し腹を立て、口を尖らせてみる。

「忠告はしたからね」

誰に言うでもなく、独り言をこぼしながら、広場の地面を強く蹴った。

瞬間。

重力を無視して高く高く跳躍するシャル。ゆるやかな弧を描くように、舞い上がる小柄な体。

その高さは巨大な怪獣のさらに上を飛んでいる。

シャルの真下に怪獣の頭頂が位置したとき、飛翔の流れがぴたりと止まり、落下が始まる。

「アタシの仕事を邪魔すると、痛い目みるんだよ？」

細い木の枝を振りかぶり、怪獣がやっと敵の存在に気付いて振り向き、頭を上げた時。

空気を引きちぎるような音をたてて、細い細い枝が、うろこに覆われた脳天を直撃していた。

## CHARTREUX【III】

みしつ、と軋んだ音のあと、エリマキトカゲの巨体がゆっくりと真横に倒れる。

地面を揺らし、豪快な音が広場に響き渡った。

怪獣の目の前にある噴水と、それを守る町民達に怪我はなく、土埃を被っただけ。

ふわりと、音もなく天から舞い降りた金髪の少女。

自分達の子供くらいの年齢の少女が、涼しげな顔でいとも簡単に怪獣を昏倒させ、悠々踵を返していく様を、町民達は呆然と見つめていた。

シャルが水和気町の入り口へ戻ってくると、帰りを待っていた一頭のドーベルマンが、黒い外套を口にくわえて差し出す。

「ありがとう」

そっけなくお礼を述べ、再びばさりと羽織る。と、突然何かが今羽織ったばかりの外套にしがみ付いてきた。

目線を下にむけると、先程“依頼”をした、初老のふくよかな女性ではないか。

「ありがとうございます！　ありがとうございます！　こんな言葉では言い表せぬほど感謝しております！　ああ、怪我人も出ず、町の水源である噴水も無事だったなんて、奇蹟ですわ！」

感極まって泣き出した女性にうんざりしながら、シャルは天を仰いでため息を吐き出す。



「では、ご依頼はこれにて完了いたしました。ええと、依頼の請求金額の件ですが」

水を差す台詞を淡々と述べる、犬。

女性はやつと冷静を取り戻し、しゃべる犬を目の前にしてぎゅっとしてくるようだ。

「害獣駆除の料金設定として、30万ペケポン戴く規約となつているのですが……」

「ぶっ、ペケポンってヘンな通貨！ この町だけじゃない？ ペケポンなんてさー」

シャルの茶茶には全く触れず、30万の金額に驚く女性にも構うことなく、紳士的な声調の犬は続ける。

「弊社社長が愛飲するこの水和気町限定ミネラル水、“おい お水”を一ケース頂けるなら、依頼金は相殺いたしましたしょう」

この町の地下から湧き出る水は世界NO.1のシェアを誇るミネラルウォーターなのだ。

つまり、怪獣を倒した報酬として、金ではなく、世界で人気の天然水で支払ってくれと言うこと。

女性は、地下からいくらかでも湧いて出てくる水が30万ペケポンの代わりになるというなら、いくらかでもどうぞ。と満面の笑みを湛える。

広場までの通りに並ぶ商店と民家。

女性は、あんだあゝ、と飲料店の主人を呼び、半壊した店から業者用つば付き帽子を被ったオヤジがダンボールを抱え、よろよろ歩いて来た。

両手で抱えるのがやっとのダンボールを少女と犬の前にどすんと置く。

ひいひい肩で息する彼の回復を待つて、一同やや沈黙。

「ケース買ったあ……もしかしておたくら、（株）コクシンドウ黒獅堂の社員かい？ あそこの会社の社長サンは毎月ケース買いしてくれるし、ひいきにしてもらってんだよ。助けてもらった礼もあるし、今後はうんとサービスさせてもらいます、って、伝えといてくんねえか？」

復活を遂げたオヤジは、ところどころ抜け落ちた歯をにかつと見せて、シャルに向けて社長への伝言を述べる。

「わかった、伝えとくねー」

ひらひら手を振り、愛想笑いを浮かべて、シャルは半壊した店へ戻る飲料店の主人を見送った。

初老の女性が二度頭を下げてお礼を言い、店の主人のあとを追ってゆく。

ふと、広場から大人たちの声が聞こえてきた。

町民たちの掛け声と、重たい何かを引きずる過擦音。

気絶した怪獣を町の外に出そうと、皆協力し合って引っ張っているのだろう。

意識が戻れば、迷子になってしまった怪獣は、己のねぐらに戻るだろう。

やっと平和を取り戻した町。

犬が後脚でシルバーの首輪にぶら下がるネーム札式通信機を揺らした。

「こちら監視官、デューヴァルト。任務完遂、転送準備完了、座標12-005,778-9。」

自ら名乗ったドーベルマンは数字の羅列をぶつぶつ呟く。

言い終えると、ふう、と短くため息を吐き、ぶるっと体を震わせ身ぶるいをした。

「ねえ、ドンちゃん」

不意に声をかけられ、犬　デューヴァルトは後ろを振り返った。

「今回の社長の命令、トラブル処理専門のアタシが受けるような内容じゃなかったよね？　だって、社長が飲む“おゝい　お水”を買って来いって内容じゃん。なんでバイト君じゃなくて、アタシだったのか。やっと分かった……」

ふくれっ面で、深海色の左目をキツと細めるシャル。

そう。

社長の命令とは、ただ水を買に行く、というパシリに他ならなかったのだ。表向きには。

「有能なエージェントの中でも、シャルトリュー、丁度キミだけが暇そうでしたからね」

「ひ、暇って！　勝手に暇扱いしないでくんないっ？！　任務終わってちょっと休憩してただけ！」

ぷりぷり怒ってみせるシャルを無視して、監視の任務を受け持つドーベルマンは頭を正面に戻す。

水と気町と灼熱の荒野の境目、ちょうど、ようこそ水と気町への看板の下に、電気がパリツと走った。

「ふふ、冗談ですよ。貴女は社長が認める優秀な“厄事請負士”……このお遣いはシャルでなければならなかったのです」

「ま、優秀なのは確かだけど」

犬はなだめるように、静かに語る。

未だ怒っている素振りで、腰に手を当てているシャルの頬に朱が差しているのを、デユンヴァルトは目ざとく見つけていた。

「丁度“おゝい お水”も無くなりかけ、バイト君に買出しを頼もうとした、5日前。名水地である水和気町に突然現れた害獣をなんとか駆除してやりたい。そんな社長の善意がこのお遣いですよ？」  
「分かったから、いちいち上から目線で説明しないでよ。犬のくせに」

デユンヴァルトは声からして上機嫌なのだろう。対するシャルは不機嫌そうにそっぽを向き、刺を含ませ言葉を返した。

「本当に分かっていますか？ こちらから水の代金を支払うことな  
く手に入れることができ、なおかつ今後水和気町と更なる親睦を深める架け橋を作る……社長の目的は善意の利潤。」

全ては予測されていた結果。

シャルは初めてこの“パシリ”の意味が持つ真実を知り、目を丸くした。

「だから、最高の腕を持つ厄事請負士である、シャルトリュー。キミに任務が当てられたのですよ」

「……任務の詳細を今になるまで内緒にしてたのはひどくない？」  
「無事任務を終えるためです」

人間じみた含み笑いに、シャルは嫌そうな顔でふんと鼻を鳴らす。

「まあ、シャルが町の座標を間違えて、ここへたどり着くまで5日もかかったことは……想定外でしたが」

紳士的な口調で、ぴしゃりと言い放つドーベルマン。

四肢をゆったり進めて荒野へ身を乗り出した瞬間。

町の入り口と荒地の境目に電気の火花が音をたてて弾ける。

刹那。

シャルの目の前にいたはずの一頭の犬は影も形もなくなっている。転移装置が正しく遠隔発動された証拠だ。

世界最高のミネラルウォーター一箱腕に抱え、不機嫌に頬を膨らませたシャルも電気の境を、通り抜けた

次に彼女が目を開ける場所は、白塗りの壁と大理石の床、広いフロアが幾層にも連なるビルの一室。外見上からは想像もできない不思議な空間。

そここそが、シャルの居場所。

“株式会社 黒獅堂”

ようこそ、株式会社 黒獅堂へ。

弊社はどんなご依頼も承る優良企業でございます

## CHARTREUX【III】（後書き）

シャルトリュー（CHARTREUX）はネコの品種のひとつで、  
原産国フランス。

本作の登場人物シャルは、このネコの名前がコードネーム。

## 2章 D H O L E 【 I 】

背の高いビルとビルに挟まれた、やけにこじんまりした細い建物。無機質な灰色のそれは、せいぜい三、四階ほどの雑居ビルのようなだ。

見栄えの良いビル群の中に、ぽつねんと存在するその建物には、一つの看板も掲げられておらず、出入りする人の姿もない。

だが。

そこそが裏世界で優良企業と有名な 株式会社 黒獅堂。

社長室とプレートの張られた木製ドア。

その蝶番と扉の隙間から漏れてくる声の一つは、まだ声変わりをしていない少年の声。

もう一つは豪快な雰囲気を含む、壮年の男性。

「その依頼内容で、本当に宜しいのですね？」

「ああ、もちろんだとも。何年先になるか、もしかしたら一生ないかもしれん。そうなった場合は前払いの金は御社への寄付という事にしようではないか」

ドア越しから貫禄が滲んだ、威厳たつぷりの笑い声が響いた。

「……本来規約として依頼料は全額前払いと決まっていますのですが……こういった内容ですので、五千万は前払い、残りの五千万は依頼が完了してから頂く事に致します。いかがですか？」

「ふふつ、客の扱いをよく知っておられる若社長だ。そうしてもらおう」

恭しく相手に尋ねる少年。丁寧に淡々と述べる声にはさほど感情が乗っていないようだ。

一方、相手の声は会話を楽しむように弾んでいる。

「では、今日中に依頼料の振込みをよろしく願います」

「分かった。今日の依頼を忘れないでくれたまえ、間違いなく宜しく頼むよ、獅堂社長」

壮年の男性が語尾を強めて社長に念を押す。

「もちろんです、弊社の社員は実に優秀な者ばかりです。このご依頼を果たすときには、最も腕の良い仕置請負士を派遣いたします」

「ははあ、それは心強い」

社長の口調は平板としているのに対し、壮年の男は感嘆したのか、ただの興味本位か定かではないが、たぶんに興奮しているような口ぶりである。

「ご依頼、誠にありがとうございます」

そんな言葉を背に受けて、男はガチャリ、とドアノブを押し開けて最上階のフロアを去ってゆく。二度とやって来ることのない、フロアの床を、エレベータを、カーペットを力強く踏みしめ、悠々と去って行った。



「ドール、社長からの司令だよ。コレ資料。すぐに動いてくれよ」

投げやりな、なおかつ覇気の全く感じられない所作で資料片手に言い放つ、青年。

外観上、三、四階ほどしかないはずのビル。

しかしこのビルに存在する九階の第九会議室で、ドールは分厚い資料と、面倒な仕事を受け取らされた。

パンパンに膨れ上がったバインダーに収まる資料を見つめながら、紫紺の眼が気だるい光を帯びる。

「またオレ？ つーか、シャルトリューがいないんじゃ、任務ガンバル気も起きねえっての」

パイプ椅子に腰掛け、長机に突っ伏しドールはぶちぶち文句を呟いた。

口さえ開かなければ、無造作にスタイリングされた緋色の髪、<sup>タンザ</sup>宝石をはめ込んだような切れ長の目、整った輪郭や鼻筋と唇。十六、七歳の端麗な容姿のドールではあるが、ひとたび口を開けば見た目とのギャップが実に激しい。

未だ机に顔を埋める少年に目をやり、栗色の頭を抱えてため息を吐きだす青年、ハインファルフォ。

「あのね、行動は迅速に。って、社訓でしょ。ドールが動いてくれなきゃ、俺が上に怒られんだよ？」

「オレはオレのルールでやるからいいの」

注意を促すハインファルフォに対し、上体を起こし頬杖を付きな

がら、にやりと挑発的な笑みを浮かべるドール。黒い革ジャンの下に、はちみつ大好きなクマの真つ赤なキャラクターTシャツを着る精神も理解できないが、利己主義な性格もハインファルフォには理解できない。

「とにかく、任せたからね。あと、シャルならちゃんと任務を終えて今しがた戻ってきたよ」

もう知らない、とでも言うようにため息をひとつついたあと、ハインファルフォはドールのやる気を出させる一言を残して踵を返す。パイプ椅子の背後にあるドアを押し開ける青年。

ドールは目を輝かせて振り返ったとき、後ろでちょこんと結った栗毛と、しわしわのシャツ、ダメージジーンズの後姿が、閉まってゆくドアの隙間から見えた。

「ハハッ！ そうゆうことなら、五日ぶりにシャルトリューを抱きしめてから、仕事に行くとするか」

声を弾ませ、頬を緩ませながら悪戯っぽく目を細める少年。すつくと立ち上がり、先程の気だるさを微塵も感じさせずに意気揚々と会議室を出てゆく。

長い廊下を皮製のブーツ独特の音を響かせて、仕置請負士　ドールは歩き出した。

“一つ森を築き束ねる巨虎を仕留めよ、無粋なる牙を剥く獣を碎け、猛る己が獵犬”

三階フロアは全面休憩ロビーになっており、喫煙ブースで煙草をふかす人達や、自販機の側で談笑するスーツ姿の人達、長椅子に腰

掛け小休止を取る会社員達……。

ドールはひとり壁に背をもたれて、受け取ったバインダーを開いていた。

開けて一枚目の紙には、たった一文のみが手書きで綴られている。社長直筆の司令文。

「あいかわらず、達筆なこと。だけど全く意味わかんねーや。ま、任務自体は楽勝だろーけどな」

孤を描く唇には余裕さえ浮かんでいる。

司令文をビリッと引きちぎり、くしゃくしゃに丸めて、真向かいにある自販機の横に設置されたゴミ箱へシュート。

箱に吸い込まれたのを確認して、満面の笑みを浮かべ再び資料に目を落とす。

「うげっ」

二枚目以降の資料にはうんざりするほど活字で埋め尽くされていた

はあ、と深い嘆息を吐き出し、しゅしゅ一字一句頭へ叩き込む。

ドールの任務は資料の暗記から始まるのだ。

それは、決して間違ふことのできない、一度きりの危険な仕事なのだから。

依頼主：マルコ・ハーマン

依頼内容：実父、デイクソン・ハーマンの暗殺

依頼料：八千万ダラ

指定日：本日午後八時、祝賀会の壇上にて

「デイクソン・ハーマン……この名前って」

紫紺の眼を細めて資料の一文をじっと見つめる。

頭の中に蓄積された情報を洗い浚い引っ張り出して、名前の主について思い出そうと思考を巡らす。

「どこかで、見たような……」

ぼつりと呟かれた声は、ロビーの喧騒にかき消されていた。

## D H O L E 【 I I 】

P M 7 : 5 0

大きな窓ガラスから見えるオーシャンビュー。

海浜側に建つ、超高級ホテルの最上階で行われている祝賀会。

世界最大級の自動車メーカー「ハーマンゼネラル・モーターズ」の、世界販売台数百万台突破の記念パーティー、多くの著名人が集まるホールを見下ろして、七十三歳の老人は朗らかに微笑んでいた。壇上には茶色いスーツでめかしつけた主賓のデイクソン・ハーマン、四十代半ばの息子マルコが豪華な革張りの椅子に深々と腰掛けしている。

マルコは時折腕時計で時間を気にしながら、父の饒舌に適当な相槌を返すだけ。

じき、予定の八時を迎える。

あんたのおかげで、私はいつまで経っても経営力の無い、ボンクラと陰口を叩かれてきたのだ。この台数を得るのに、私がどれだけ苦労したのかなど、誰一人分かってなどいない……。

隣で微笑む老父に、愛想笑いを浮かべて腹の内では舌打ちをする。

遺産はこれで嫌というほど残しているだろう？ 後は私のやり方でどんな事業を拡大して、ゆくゆくは世界のマルコ・ハーマンになるのだよ。そのために、あんたは死んでくれ。

壇上からは煌びやかな衣装と豪華な料理に会場は華やいでいた。誰もが心から偉大なる老獺を祝福している。

ただひとり、胸の内に憎悪と狂気を募らせている者、それは主賓、

デイクソンの隣に座る息子のマルコだった。

P M 8 : 0 0

マルコはちらりと腕時計へ視線を走らせ、指定の時間になったことを確かめた。

ひどく不気味につり上がる唇の端。そこには気品の一つも感じられぬ、歪んだ唇。

しかし、穏やかな空気の会場で、誰も悪魔の微笑みに気付く者はいなかった。

そんな顔を父へ向けた、刹那。

壇上の主賓席に、四方八方から注がれる天井ライトの光でできた薄い影。

その影がみるみるうちに濃くなり、暗黒色へと変わったのだ。そこからどす黒いなにかが頭を出す。

闇から生まれる悪魔と表すのが相応しいだろうか？

床の影からタールを被った人間のような形のモノが、とうとう全身を現す。

それはデイクソンの背後でにたりと嗤っているように、マルコには見えた。

背筋がぞくりと震え、生まれて初めて不気味な存在を知り、戦慄を覚えたのだ。

彼を除く会場の誰一人、その異常な存在に気付いてはいない。

来たか、殺し屋！

マルコ・ハーマンが短く息を吸い込んだその時。

主賓であるデイクソンが手にしていたワイングラスが赤いカーペットに落下する。

薄いカーペットは衝撃を吸収することなく、透明のグラスを軽快に粉碎した。

壇上の人間も、ホールで会話を楽しむ人間も、音の出所へ目線を走らせる。

ガラスの割れる音はどうしてこうも、ヒトの心を刺激するのだろうか。

ついに、楽しく優雅なひとときの終わりがやって来た。

「ぐ……」

聞き取りづらくもった悲痛の声。

声と同時に、主賓の老人の首から鮮血が勢いよく噴出す。細かい霧状の血液は美しくもあり、心臓を凍らせるには十分な残酷の色。

その場の皆は一瞬にして声を失った。

見慣れぬ光景に、ただ目を大きく見開き、瞬きも忘れ見入っていた。

老齡の主は椅子から立ち上がり、首を押さえてよろめきながら、数歩壇上をさまよう。

赤い絨毯に赤い血がじわりとしみこんでゆく。その間も、噴き上がる血はデイクソンの茶色いスーツを変色させていた。

呻き声をあげながら、よたり、よたりと前進する。

立って歩くことのできなくなった老人が力なくうつ伏せに倒れたとき。誰かが、逃げろ、と叫ぶ。

叫ぶ声と、血まみれの主賓、背筋を伝う汗。

それだけで、パニックに陥るには十分であった。

恐怖の渦と化した祝賀会。

絶叫が飛び交う。

紅に誰もが寒気を覚えた。

絶叫。

絶叫。

そして沈黙。

「ふ、ふふふ、ふはははっ！」

しんと静まり返った会場で、マルコは腹を抱えて高笑いをした。

「残念でしたね、お父さん！ とつと現場を退けばいいものを、いや、もっと早く死んでくれていたら暗殺など依頼していなかったのに！ あんたの遺産は有意義に使わせてもらっよ！」

いやらしく唇を捲り上げ、満足げに目を細めて叫ぶ。

そんな息子に父の最期の言葉は聞こえていなかった。『たのんだ、ぞ、社長』

巨大企業を束ねる偉大な人物は、あっけなく、静かにこの世を去った。

何者かの手によって……。

「ひひっはははは……」

耳障りな哄笑は途中で途切れた。



突然、口の中に広がる鉄錆びた味、胸に走る激痛、揺れる視界  
マルコは目を剥いて自分の胸に視線を落とす。

「な、んだ、これは」

胸から人間の腕が突き出している？

口から血を吐き出しながら、なんとか言葉を絞り出す。

歯ががちと鳴るのを抑えることができない。

上手く焦点を定めることもできない。

そんな男に、背後から声を掛ける者があつた。

「残念だったね、デイクソン・ハーマンを殺してほしいなんて言わ  
なけりゃ、アンタも死ぬことなかったのに」

## DHOLE【IIII】

ふふつと微かな笑い声を含ませて、猟犬が囁いた。

「ど、どうゆう……こと、だ、おまえ、あの会社の……いつ、殺し屋、だろう?! う、裏切った、な……!」

憎悪に染まったかすれ声を必死に絞り出すマルコ。  
瞬間、体を貫いていた腕が勢いよく抜かれた。

「ぎゃあああああっあっあっ!!」

真つ赤に染まる胸部を押さえながら、おぞましい叫び声をあげて、床にのた打ち回る男に冷めた視線を投げかける人物　ドール。

「あはつ。『裏切った』?　寝言いつてんじゃねえーよ。オレはちゃんと仕事をこなしただけ!　アンタからの依頼と、十年前に予約していたデイクソン・ハーマンからの依頼を」

朦朧とする頭でマルコは言葉の意味を探った、が、息をするのもままならなくなり、脳は酸欠状態。

倒れた男の正面に屈んで座るドールの服装は、相変わらずの黒い革ジャンにクマのシャツ、ジーンズにブーツ。

しかし捲り上げた右袖、そこから露出された腕だけが真つ赤に染まっていた。

「大丈夫、真実を知るまでの時間は与えてあるからよ」

にっこりと目を細めるドールは天使のように美しく、悪魔のよう

に残酷に語る。

マルコの体は少しずつ寒気を覚えていった。

「今から十年前、大企業の社長サンがちょっと変わった依頼をしに来たんだ、いつの日か現れるかもしれない『自分を殺す首謀者を殺してほしい』ってね。」

富と名声を得た人間は、他人の憎しみや怒りを買うつてこと、よく知ってるよ。普通なら殺されそうになったら、護ってくれって言いそうじゃん？ だけど、やっぱ偉人の考えは違うねえ。復讐の方が大事らしい。ま、俺はそうゆうの、好きだけど」

一呼吸おいて、ドールは続ける。

「これが、デイクソン・ハーマンの最期の仕掛け」

口元が歪み、それは見るものの背筋を凍らせる悪魔の笑みか。

たいして回らぬ頭で、目の前の少年が言った言葉を考えるマルコ。つまり、父はいつか訪れる死に罠をかけていた、という事になる。

だが、私は実の息子だぞ。

もはや声も出ぬマルコは、心の中で叫び声を張り上げた。

「ぷっ、くっくっ、あははっ！ 実の親父を殺してくれと頼んだア  
ンタが言うセリフじゃねーだろ？！」

どうやって心を読んだのか？

ドールはげたげた腹を抱えて、当たり前前言葉を吐いた。

会話の間も、赤いカーペットは水分を含んでじっとり濡れてゆく。

「あの日の依頼で、まさか息子が自分を殺すとは、思ってたなかった  
だろーなあ！」

立ち上がった少年は一段高い壇上からぴょん、と飛び降り、出口  
へ向かってやわらかな絨毯の上を歩む。

「ま……ま、て……」

口を開くと、ごぼりと血液が大量に溢れ出た。

震える手を小さくなってゆく暗殺者に向けて伸ばすも、それは空  
気を掴んだだけだった。

当の暗殺者は大きな出入り口用扉を押して、惨劇の会場を去って  
行った。

「……ま」

伸ばした手は行き場を失い、ぱたりと力なく赤い床に崩れる。

とうとう、男の虚ろな目から光がふつと 消えた。

壇上に横たわる父子は鮮血の舞台で幕を閉じたのだ。

「任務完了」  
ミッシェンコンプリーター

黒いジャケットから取り出したごつい無線機をオンにして、ドールは仕事の終了を告げた。

ノイズ混じりで、無線機から返事が返ってくる。

『了解、十年前の依頼も、無事完遂できたようだなによりだ。ご苦  
労様、ド  
』

相手が言い終わらぬうち、無線機の電源をオフにする。

ドールは薄い唇をふっと緩めると、突然狂ったように大声で笑い出す。

「ハハッ、あはははははははははっ！」

ひいひい腹をよじって、月下のもと、仕置請負師     ドールは嗤った。

しかし、何を思ったのか笑い声はぴたりと止み、獵犬の瞳が不気味に照らされる。

一瞬で現れる冷酷な面持ち。

「……ハッ。人間って、くだらねえ生き物だな」

吐き捨てるように、毒を含んだ言葉が黒き獵犬から発せられた。

暗い昏い黒に染まった空、たった一つ青白い光が少年の緋髪を赤く輝かせる。

祝賀パーティーの開かれていたホテル、その屋上。

ドールはフェンスの上で仁王立ちのまま、つまらなそうに空を仰いだ。

「そつだ、デイクソン・ハーマンの名前は丁度あの日、社長室の前で盗み聞きして覚えてたんだっけ……で、怒られたんだっけ……」

昔の記憶を思い出し、ドールはぽつりと呟き、苦笑した。

海浜の高級ホテルの入り口付近がにわかに騒がしい。赤色灯が夜に目立ち、サイレンの音がどんどん近づいてくる。

どうやらこれから色々面倒なことになりそうだ。

任務以外で人間と関わり合いを持つのは御免こうむりたい。

「そろそろ帰るかなあ。あゝあ、やっぱ<sup>ダブルミッション</sup>二重任務は疲れるよなあ」

うんと背伸びをして、ばやくドール。

フェンスを蹴り上げ、黒いジャケットを翻し、夜空に身を投じる。

ふわり。

飛んだ先は、屋上の床とは反対側。一般人であれば、数秒後には冷たいコンクリートに叩きつけられ、あの世へ逝けるだろう。

しかし、ドールの姿はアスファルトの上にも、空中にも、どこにも無くなっていた

「ただいまあゝ、あ、ハル後でベブジNEXT買ってきてえ。オレのど渴いちゃった」

「おかえり……話の途中で勝手に無線、切るなよな！　ってか、俺はドールのパシリじゃないんだけど！」

目も覚めるような明るいロビーで、エージェントを出迎えたハインファルフォはドールの自己中発言に、気だるい表情でツッコんだ。

社内の誰もが畏怖する仕置請負師、ドールを温かく迎える人物は少なく。

栗毛の青年は、文句を言いながらも、無事に帰ってきた少年に目を細めて優しく見つめた。

ここは株式会社 黒獅堂。

どんな依頼も承る優良企業

二人は一階ロビーで他愛なくも、どこか安心する会話を交わした。

## DHOLE【III】（後書き）

ドール（DHOLE）はイヌ科、別名をアカオオカミという。  
本作の登場人物ドールは、この動物の名前がコードネーム。



### 3章 SPARROWHAWK【I】

「ばかな！ どうして奴らは人員配置を把握している？！ なぜこの基地の存在が西軍に知られているのだ？！」

怒声が響く。

無機質なコンクリート製の壁の内側にまで響く止まぬ銃声。

薄暗い司令官室で、濃紺の軍服を身にまとった、初老の男が肩を震わせ立ちすくんでいた。

苛立たしげに目の前の大画面モニターを凝視している。

「それは、僕が」

ふいに背後から投げかけられた、男性にしては美しく澄んだ、すこし高めの声。

軍服の男はドキンと心臓が跳ね上がるのを感じ、慌てて身を捻る。気配を絶ち、背後で置物のように佇む人物を見たとき、男の心臓は、再び跳ね上がった。

「敵国のスパイだから、です」

口元でゆるやかに孤を描き、美しく奏でる男の声は平然と、言った。

現在から三ヶ月前

とある西の森の奥。

ひび割れ、岩が転がる更地に、天にそびえる建物が一つ。  
荒野にそぐわない、実に場違いな建物がぼつんと建っていた。

それは看板のないねずみ色のビル。

ビルの正面に構える、味気ない自動ドア。

と、滑りの悪い音をたてて、開く自動ドアから出てきた三人の男達。

三者ともカーキ色の迷彩服。どうやら軍服のようだ。

彼らは後を振り返り、改めてこの奇妙な光景に目を瞠みはった。

乾いた大地にあまり背の高くない、灰色の建物が一棟だけぼつんと建っている。

不自然で、不可思議。

「西の森の奥は荒地だと聞いていたが、このような近代的な建物があるとは、思ってもみなかったな……」

迷彩柄の軍帽をくいとし、浅黒い肌の、リーダー格と思われる男が呟く。

「あんなダイレクトメール、イタズラだと思っていましたが……。  
將軍、本当に依頼をしてしまつて良かったのでしょうか？」

「胡散臭い会社だと思いますよ。『どんな依頼も承ります』なんて誇大広告もいいところです、それに……私たちの前に現れた秘書だという男も、明らかにただのチンピラでしょう」

將軍と呼ばれたリーダー格の男に、二人の部下はそれぞれ意見を述べた。

先日、郵便で届いた一通のダイレクトメール。  
差出人名には「緑化推進委員会会長」とだけ記され、住所や電話番号は明記されておらず。  
その一枚の紙切れにはこう書いてあった。

弊社はどのようなご依頼も承る優良企業でございます。

再生から破壊、どんなニーズにもお応えできる、唯一の企業。

株式会社 黒獅堂。

ご依頼の際は弊社までお越しく下さい。

西の森から3キロ直進。

#### 貴軍に勝利を

美しくタイピングされた文章の一番下に、手書きの文字が添えられていた。

達筆に思わず目を奪われ、そして、たった6文字に將軍は心を揺さぶられた。

「まあいい。万が一依頼が成功せずとも我が軍の兵が被害を受けるわけではない。前金は溝に捨てたと思えばいいことよ。あとは気長に報告が来るのを待てばいいだけだ」

期待少なに言い捨て、將軍はふと振り返って背後に佇むビルを一瞥する。

建物から少し離れた距離に停めてあったジープに乗り込み、三人の軍人は荒野をあとにした。

ここは西と東が対立する世界の中の小国。

しかし、何十年もの時間をかけて紛争は激化していく一方である。政治的な思惑が裏に潜んでいるのだが、表向きには宗教的価値観の相違、その軋轢から触発された戦争　世間一般ではこれが理由とされている。

延々と続く消耗戦に、戦争の渦中にいる兵士たちも、戦争の火の粉をかぶる罪なき民衆も、皆疲れきっていた。

相手の懐に入れさえすれば、出口が見えるのに。

しかし、幾度となく送り込んだ作業員は全て殺され、幾度となく潜入してきた作業員を殺す。

そんな堂々巡りを繰り返してきた昨今。

この一通のダイレクトメールで、小国の運命は変わりだすのだ。

「ティーク＝ファルス少佐。それが本任務での君の名と階級だ、スパロウハーク」

低く、鋭い男の声。会議室の一室で歩きながら仕事の内容を述べる男は、長机に座る青年へ目を向けた。

「聞いてるか？　スパロウ」

「ええ、だいたい把握できましてから詳細については結構ですよ」

スパロウハークと呼ばれた青年は、優雅に足を組み、柔和な笑みを男に向けた。

二十歳そこそこの年齢で、ライトグレーのスーツを見事に着こなす様は優雅に尽きる。

目の前に広げた分厚いファイルをパタンと閉じて、息を吸い込む。鷲色の髪の下、長いまつげを伏せると秀麗な面立ちがいつそう引き立つ。

大きく息を吐き出しつつ、瞼を持ち上げる青年。

新緑色の瞳が、会議室の窓から差し込む光を浴びて、宝石のように輝いた。

「長く紛争の続く西と東の小国。東軍に潜入し、依頼を受けた西に、東の情報を流しつつ東軍壊滅の道筋を作る。と、こんなところでしようか？」 喜屋武<sup>きやん</sup>」

涼しい顔で言い放つ美貌の青年の言葉に、悪意は微塵も感じられない。

それもそのはず。

これはただの仕事なのだから。

「いつもながら、頭の回転が速くて助かるね。さすがは一流のスパイだ、頼んだよ」

くせつ毛かパーマか判別しがたい黒髪に飾られた彫りの深い顔立ち。

社長秘書として洗練された立ち振る舞い。

しかし、その肩書きに不釣り合いな黒いスーツの下に着込まれたアロハシャツ。そして顎下の無精ヒゲ。おかげでチンピラ程度にしか見えない。

おそらく一步外に出れば、誰もが彼を社長秘書などと大それた役職に就いているとは思わないだろう。

言って、アロハシャツの社長秘書　喜屋武は苦笑いを浮かべた。  
スパロウハークは優雅に足を組み崩すと、机にファイルを置いた  
まま、喜屋武に軽く頭を下げて会議室のドアを押し開けて出てゆく。  
防音の施された十階の通路に革靴の音は床と壁に飲み込まれたよ  
うに、重く鳴った。

## SPARROWHAWK【II】

小国の東軍が有する人民解放軍。

ここに工作員として潜り込んだスパロウハーク、いや、ティーク  
「ファルス少佐は当然のように前線に送り出された。もちろん、こ  
れも計算済みではあるが。」

「いや、なかなかの武官と聞いておりましたが、こんなに若く二枚  
目だとは思いませんでしたよ」

同僚達の言葉は社交辞令を通り越して、皮肉めいた意味合いが込  
められていた。

哄笑が轟音の鳴り止まぬ戦場に響く。

ファルス少佐は愛想笑いを貼り付け、ふと、この軍に来る前  
昨日出会った『ティーク』ファルス』その人を思い起こした。

確かに武官と表すに相応しい風貌。

自信に満ちた真っ直ぐな瞳はどこか野生的で。

歳は四十代前半といったところだったか？

彼は実にいい生贄スケープゴートの羊であつた。

小国東からの応援として、この戦死者が多い人民解放軍の中核を  
担うに相応しい地位を持って、やって来ることになっていた。

『ティーク』ファルス』はこの戦場に足を踏み入れる前に、この  
世から去った。

いや、排除した、と述べるのが相応しいか。

欲しかったのは彼の名前と地位だけ。

あとは、終焉に向けて、役者がティーク＝ファルスを演じればいいのだ。

「あなたの死は、決して無駄になどなりませんよ」

同僚達が去って人氣の無くなった野営テント。

ファルス少佐は今亡き一人の武官へそつと呟いた。自ら手を下し、彼の命を奪った青年は罪悪感など持ち合わせていないかのよう  
に、冷然と、呟いたのだ。

手にしていた紺色の軍帽を被り、同色の軍服である上着に袖を通す。

星型の階級バッジを胸に付け、噴煙と土埃の舞う戦場へ軍靴を進める。

これが、依頼のはじまりだった。

ここが、全てを欺き、全てを陥れる『諜報代理士』たるスパロウ  
ハークの、戦場。

このときは東の軍人も、西の軍人さえも知らない。

株式会社 黒獅堂の真の狙いを。

三ヶ月の間で、多くの軍人が戦死し、兵を纏める人物は次々と入れ替わっていった。

三等兵、二等兵などは生き残れる方が奇蹟に近い。

先月まで悠々構えていた東軍上官たちも、迫り来る西軍の猛襲に



命を減らしていく。

しかし、東軍の人民解放軍総大将とも言える司令官は、藪の奥に隠された軍事基地に立てこもり、己が一人戦況を観望していたのだ。軍の上層部、一部の人間にしか知らせていない、秘密の施設。

そこに、ファルス少佐　現在は司令官の側近、幕僚長となっている　は、いた。

「チツ、だいぶ押され気味だな……そろそろ本軍に増援を要請するかね。どう思う？　ファルス幕僚長」

薄暗い地下の司令室で、青白い光を放つ大画面モニターを睨みつける、紺色の軍服をまとった初老の男。でっぷり太った腹のせいで軍服が伸びているように感じる。

男の胸に光る金色のバッジだけが紛れもなく人民解放軍のトップたる証。

男は、戦死したばかりの側近に代わって配属された、元少佐テイク・ファルス幕僚長に尋ねた。

人を試すようないやらしい笑みを浮かべ、男は部下の言葉を待つ。

「必要ありませんよ、司令」

モニターの上に掛けられた時計を見つめながら、ファルス幕僚長が落ち着き払った声で、東軍の司令官に言い放った。

なに、と司令官が声を荒げたその瞬間。

大画面モニターから目を覆うほどの閃光が連続して走った。

激しい光の連鎖に、司令官は画面の向こうで何が起こったか理解するには、時間がなかった。

やっと画面が落ち着きを取り戻したとき。

司令官の目に飛び込んできたのは、戦場の物見台に設置した監視カメラが捕らえた、驚くべき光景。

半年前までは民衆が憤ましく暮らしていた街は今やもう、平和を失っていた。

戦場となった廃墟群。

その一ヶ所が噴煙をもうもうと上げているではないか。

東軍の一個分隊が身を潜めていた、基地代わりの民家。

ピンポイントで爆撃を受け、家屋は木っ端微塵に吹き飛んでいたのだ。

分隊約十名の体も、建物と同じくバラバラに千切れて吹き飛んだであろう。

濁った瞳を揺らして、モニターを凝視する司令官。

「ば、ばかな……」

震える声で、老獺の司令官はモニターにかじり付く。そこで、瞬時に画面が切り替わった。

司令官の背面では慣れた手つきでコンピュータのキーボードを叩くファルス幕僚長。

次に映し出された光景も、先ほどと同じく凄惨な現状。基地としての民家は跡形もなく。

キーボードがもう一度叩かれた。

画面には違った場所で、同じく血の海が広がり、紺色の軍服を身につけた屍骸が転がっている。

もう一度、叩く。

もう一度。

もう一度。

もう一度。

画面は東軍の重要拠点七ヶ所全て、沈黙を映し出していた。

と、突然。

この軍事基地に銃声があがる。

ここの所在は人民解放軍の上層部とこの基地を護衛する数人の兵士しか知らないはず。

軍内部には知らない者がほとんどだ。

なぜ銃声が？

額に脂汗を浮かべ、司令官はごくりと喉を鳴らした。

そして再び連続する銃声は、この司令室の側で聞こえるのだ。

「ばかな！ どうして奴らは人員配置を把握している？！ なぜこの基地の存在が西軍に知られているのだ？！」

怒声が響く。

薄暗い司令官室に、司令官は肩を震わせ、立ちすくんだ。

焦りと苛立たしさを交えた表情で、目の前の大画面モニターを凝視している。

「それは、僕が」

ふいに背後から投げかけられた、男性にしては美しく澄んだ、すこし高めの声。

軍服の男　司令官は、ドキンと心臓が跳ね上がるのを感じ、慌てて身を捻る。

気配を絶ち、背後で置物のように佇む人物を見たとき、司令官の心臓は、再び跳ね上がった。

「敵国のスパイだから、です」

## SPARROWHAWK【III】

新緑色の眼がやわらかく細められ、穏やかに紡がれる声。なかなかの長身、気品漂う顔立ち。

軍帽を脱ぐと、鳶色の髪がサラサラ揺れる。

しかし、唇だけが全てを否定するように、歪んでいた。  
自らの正体をさらけ出したのは、ファルス幕僚長、東軍司令官の側近。

「ファルス幕僚長……いや、ファルス、き、きさまあ……！」

深い皺を刻んで、男は野獣のような瞳を眼前の人物へ向ける。

「その名は偽名ですよ」

いつもはふわりと甘く微笑むファルス幕僚長が、冷やかな笑みを作った。

男が年甲斐もなく、拳を高らかと振り上げ、ファルスに殴りかかろうとしたその時。

司令室のドアを遠慮なく叩き開ける音が。

ドアへ目を向けると、そこには血まみれの軍服で、今にも絶命せんばかりの兵士が飛び込んできたのだ。

「し、司令……ぜ、ぜん、部隊は敵の手によって……だ、誰かがわが軍の、情報を、むこうに……リークを」

必死に伝えようとした兵士の言葉は途中で途切れた　乾いた銃

声によって。

糸の切れた操り人形マリオネットのように、どたりと崩れ落ちる兵士の身体。老司令官は驚くべき光景に目を剥いた。

転瞬。

開きつぱなしのドアから、西軍の兵士達がなだれ込むように押し寄せてきた。

土語の怒号が飛び交う中。敵の言語を知らぬ、いや、今まで知らうともしなかった老司令官に、彼らの咆哮を理解する術はなく。体は無意識に震え、歯が情けなくガチガチと音をたてる。膝がわなく。

「ひっ………!!」

喉を迸る小さな悲鳴は純粹な恐怖を含んでいた。

「ま、待て！ 殺さないでくれ………！ 捕虜にでもなんでもなる、だから」

軍人のプライドを捨て、生にすがった男。  
だが次の瞬間。

耳をつんざく轟音の連続。

それは刹那の出来事。

東軍の老司令官はライフルの一斉射撃によってあっけなく終わりを迎えた。

あがる血飛沫を、新緑色の瞳が冷ややかに見るめる。

『……やはり一流のエージェントと名高い、見事な手際でした。』

スパロウハーク”殿。わが軍は最小の被害で収まりました。長きに渡った紛争も一段落し、後始末だけです。貴殿と御社には本当に感謝しております。』

精悍な、ごつごつした顔立ちの軍人が、白い歯を輝かせて右手を差し出した。

たった今、息絶えた司令官と対立していた敵国の軍隊、その頂点に立つ男が目の前の、この精悍な軍人だ。

『お褒めにあずかり光栄です、將軍。では、ご依頼内容はここまででしたね』

異邦の語源に彼らの言葉で返す青年。

新緑の眼を持つ青年はにこりと微笑み、差し出された右手をぎゅっと握り返す。

挨拶を交わす二人の後ろで、將軍の兵士達が軍靴を揃えてザッと右手をこめかみにかざし、敬礼をした。

握った手を離し、將軍も青年へ向けて敬礼をする。

青年　スパロウハークは微笑を浮かべたまま、血溜まりが広がる司令室を呼吸一つ乱さず、ゆるやかな足取りで去って行った。

『軍人でもない彼が、人間の死を目の前にしても動じないとは……ますます分からぬ企業だ、黒獅堂とは』

將軍はぼつりと、青年が去っていったドアへ目をやり、呟いた。

株式会社　黒獅堂の諜報代理士と呼ばれるエージェント。

潜入工作員、スパイ、密偵　通り名は数え切れぬほどあるそう

だが、大半は「緑の悪魔」と揶揄されていた。

敵国の情報を得るため、スパイを雇った將軍の思惑は、万が一工作員だと身元が割れてしまっても、所詮は雇っただけの人間。自国に被害が出ることはない。そう考えていた。

“ご安心ください、弊社のエージェントは実に優秀、かつ誠実。貴殿の軍の勝利は確実ですよ”

將軍はまだ声変わりもしていない、革張りの椅子に座る少年の言葉を思い出す。

依頼を申し込みに足を運んだ不思議な建物。看板一つ掲げていないそこは間違いなくひとつの企業だった。

『ああ、わが軍の勝利だ』

將軍が、感嘆の吐息を漏らした。

コンクリート製の巨大な建物所々から立ち上る噴煙。

未だ連続する銃声が建物内から響いている。

スパロウハークは着ていた軍服の上着を脱ぎ捨て、この巨大な司令本部を後にした。

「コードネーム、“スパロウハーク”任務完了、これより本社へ帰還する。座標34-111, 427-18。転送オート」

難しい数字の羅列を述べると、前方に電磁界の壁が現れる。目には見えない壁は静電気のように小さな音をたてて、間違いな



く存在しているのだ。

スパロウハークは歩みを止めることなくゆったり進み、パチンと電気が弾ける音がしたと思うと、まるで手品の如く姿をくらました。

ティーク＝ファルスの姿はこれで、永遠に見ることはない。

「今しがた任務終了の報告を受けました。さすがは腕利きの諜報代理士……わずか三ヶ月で完遂したようです、獅堂社長」

実に殺風景な一室で、アロハシャツとスーツを見事にコーディネートした秘書が言う。

「ほう。他の諜報代理士ならば、半年以上かかる任務を短期間で」

感心したように、社長室の椅子に腰掛ける黒髪の少年が目を細めた。

「前払いである依頼金一億タブはいいとして、付随で徴収した小国領土二分の一譲渡の権利書など、どうなさるんですか？」

「喜屋武、知っていますか？ 東の人民解放軍がゲリラ戦を怖れて、森を焼き払い、川をせき止め、大地を枯渴させたことを」

屹立する秘書 喜屋武に目線を走らせ、すぐに黒い眼を伏せる少年。

落ちていた声はどこかもの悲しくも聞こえた。

「長い紛争で、緑を失った土地は全体のおよそ五割にも上るのです。

私は緑が好きなんです。」

「社長、緑化推進委員会の会長もされているんですね……そちらの仕事用に……ですか」

それでこのような辺境の国で仕事を取ったのか。

緑の再生が目的であったと、誰一人気付かなかったことに、喜屋武は舌を巻く。

しかし、心が穏やかになってゆく不思議な感覚にふっと口元を緩めた。

社長は最後に、にこりと少年らしい表情を、みせた。

「スパロウハーク、君のおかげで大地への被害は最小でとどまったようだ……さすがはわが社が誇るエージェントの一人」

本人に言うでもなく独り呟き、獅堂社長は満足そうに革張りのソファに背をもたれた。

弊社はどんなご依頼も承る優良企業。

緑の再生を願い、活動する善良な企業でございます

## SPARROWHAWK【III】（後書き）

Sparrowhawkとはタカ科オオタカ属に分類される猛禽類の英名。

和名を「ハイタカ」と呼ぶ。

本作では「スパロウハーク」とコードネームを呼ばせている。

#### 4章 Mission of Trinity【I】

白くこうこうと夜空に浮かんだ丸い光。

その光に照らされて、長い影が夜のアスファルトに伸びていた。ビルとビルの間に挟まれた背の低い建物。墓場の静けさがあたりに漂う。

その建物の正面玄関前に、どこからともなく現れた長身の青年。鷲色の髪を揺らして、入り口の自動ドアに足を進める。

静寂の夜には不釣り合いな、滑りの悪い開口音。ドアをくぐり中へ進むと、頭上から差し込むまばゆい光に、青年は一瞬目を細めた。ゆっくり、ゆっくり持ち上げられる、瞼。

新緑色の瞳がフロアの天井から注がれる白光を見つめる。

「お疲れ様です、スパロウハーク」

平板な、それでいて鈴の音を転がすような女性の声が奏でられた。正面の受付カウンターに目をやると、そこにはアンティークドールのような美しい受付嬢が座っていた。純白の肌に色素の薄い金髪はウェーブがかって、高い位置で結っている。

長いまつげの下に、サファイアかと思紛う大きな眼が埋まっていた。艶やかな唇は思わず触れたいくなるような……。

「ただいま、ウルウファツエ」

スパロウハークがにこりと微笑み、受付嬢　ウルウファツエに視線を向ける。

当の彼女はにこりもしない。

表情の変化は全くなく、まるでしゃべる人形のように。

「シャルトリュー、ドール共に任務終了のため帰社しておりますわ」  
「え」

事務的に淡々と述べる受付嬢に対し、スパロウハークは彼女の報告に思わず目を輝かせた。

「シャルも戻ってるんですか？」

わずかに頬を染めて、顔をほころばせる。

そんな時。スパロウハークの淡い期待をぶち壊す、疲れたときには聞きたくない声が響くのだ。

「げっ、ハイタカじゃねえか！ 例のドンパチやってる国のスパイ活動終わったのか？！ ……戻ってこなくてよかったのに……！」

ベブジNEXT片手に、ぶすつと表情を曇らす少年、ドール。

「おかえり、スパロウ」そう言っただけをあげて挨拶する、少し眠そうな表情の青年、ハインファルフォがドールの隣に立っていた。  
「ただいまハル。それはそうと、ドール、相変わらず言葉遣いがなっていないね。僕をハイタカと呼ぶなど何度言えば分かる？ それともキミの脳みそはスポンジかい？」

ハインファルフォには笑顔を向け、視線をドールに向けた瞬間、険しい目つきに変わるスパロウハーク。

言葉に刺を含ませ、互いににらみ合う。

そんな時。

停戦を余儀なくする声が、ロビーに響くのだ。

「あ、ハイタカ！ お帰りい〜！！」

ぱつと花が咲いたような明るい声色に、ハイタカと呼ばれたスパロウハークは表情を一変。

いつもの爽やかな笑顔に甘さがプラスされた。

シャルトリューが左目を輝かせて、同僚との久々の再会を喜んだ。丁度エレベータから降りてきた少女は、勢いよく走り出し、スパロウハークの首に手を回して抱きつく。

傍から見ると、兄と妹の感動の再会……にも見えなくない。

スパロウハークは一番の笑顔で抱きついてきた少女をぎゅっと包み込む。

シャルトリューの絹に似た髪に頬を当てる瞬間が、何より心やすらぐのだ。

彼女にどんな呼び方をされても許してしまう。

「あああ〜っ！！ なっ、なっ、なんでいつも！ ハイタカだけっ！！ 俺はいつも痛烈なパンチをもらうのにつ」

目に大粒の涙を溜めて、ドールが絶叫。

悔しそつに地団太を踏みながら、恋敵へ指を差しながら癪癪を爆発させた。

「オレのシャルトリューに何すんだよっ！ 離れろ、ハゲタカめっ！！」

「なっ？！ 『オレの』とか言わないでよ、キモチワルイんだけど」「相変わらず、いい根性してますね。この僕を怒らすとは……表へでましようか、ドール」

一階ロビーで子供じみたやり取りを繰り返す三人を、少し離れた位置から呆れ顔で見つめるのは、栗毛の青年。  
ハインファルフォである。

「はぁ……任務直後だったのに、なんでこんなに元気なんだよ……」

気だるさを含んで言って、片手に持つおしるこ缶をずっと飲み干した。

そんな時、シャルトリューが降りて来たエレベータの隣で鳴るは、  
甲高い到着音。

## Mission of Trinity【II】

もう一基のエレベーターが重々しく口を開けた。

メンテナンス不足だよな、と苦い表情を浮かべるハインファルフォの目に飛び込んできたのは、ガラの悪いチンピラではなく、社長秘書の肩書きを持つ、アロハシャツの男、喜屋武である。

「ハイ、そこ止めせー」

訛りのある口調で、いがみ合うドールとスパロウハークに、ビシツと人差し指を向けて言い放つ。

社員なら誰でも知っていることだが、素の彼は社長の隣にいたり、きの、凜とした印象からかけ離れた人物である。

簡単に言えば、オンオフの切り替えに長けているのだ。

「喜屋武さん」

「おうハル、お疲れさん。三人とも揃ってらようだな」

慌てておしるこ缶を後ろ手に隠し、ハインファルフォは突然現れた上司に会釈。当の喜屋武はまったく気にする様子もなく、彫りは深いあまり大きくない目を細め、にっと微笑んだ。

「キャン、どしたの？ 上客の出迎えでもあるわけ？」

珍しい人物を前にして、シャルトリューが小首を傾げた。

そう、社長秘書が一階のロビーに現れるなど、滅多にないことなのだ。上客が訪れる場合は別であるが。



喜屋武は苦笑いをシャルトリューに向け、すぐに未だ火花を散らす二人へ視線を走らせる。

「てんめえー、後で吠えずらかくんじゃねーぞ！ そのス力した顔、ボツコボコにしてやらー！」

「はあー……。頭悪いですね。その言葉、一字一句残らずお返ししますよ」

目上である喜屋武をまるつきり無視して、二人は自動ドアの外へ走って行く。

無視 ……

ガツクリ肩を落としたアロハの男は目に薄っすら涙を溜めているようだった。

「哀れな」

ハインファルフォ、シャルトリューが同じ台詞を心の中で呟いた。

しかし、すぐにガバツと立ち上がり、勢いよく二人の後を追いかける喜屋武。

見事な立ち直りを見せ、自動ドアを飛び出した直後。

「ぎゃあああああつ」

断末魔の叫び声と共に、閉口したドアに激しく鳴り響いた衝突音。驚いたハインファルフォとシャルトリューが入り口に駆け寄った、刹那。

滑りの悪い音をたてて、自動ドアがゆっくりと開き、内側に倒れこむような形で仰向けで男 喜屋武が鼻血を流し、白目を剥いて

昏倒していた。

「哀れな」

再び、二人は心の中で呟いた。

「ぶつ、キャン、だいじょーぶ？」

「うへっ……頬腫れてますけど、大丈夫っすか？」

「そらぁ痛いに決まってるんだべのお。何でワイが殴られねばなんねえんだ……あ、いつつうー……」

片手で鼻を押さえ、もう一方の手でみぞおちを擦る社長秘書。  
もの凄く可哀相なことになっていた。

一階ロビー備え付けのチェアに寝そべって喜屋武は呻いた。

その傍らに栗毛の青年と、眼帯の少女。

少し離れた位置に彼をそんな有様にした加害者が、バツの悪そうに立っている。

緑眼の美青年、スパロウハーク。

そして、まるで関係ないといった風にそっぽを向く、少しやさぐれた少年、ドールである。

「すみません、喜屋武秘書官……大人気なかったと反省しています」

申し訳なさそうに頭を下げるスパロウハークに、喜屋武はひらひらと手を振って「気にするごどねえさ」と気遣ってみせた。それでもみぞおちに蹴りを入れた張本人は眉をへの字に下げたままだった。

一方。

「チッ、パー助が出てこなきゃ、俺の必殺右ストレートがハイタカにヒットしてたってのによお、

あっあだだっ！！」

微塵も反省していないドールは不意にがしつと頭を掴まれ、首の根元からかなり無理な角度で曲がる。

ハインフルフォが腕に渾身の力を込めた。

「こんの、バカドール！ パーマネントだからって、パー助って言い方するなよ、殴ったことあ・や・ま・れっ！！」

「いでででっ何すんだっハルのくせにっ」

もみ合うコンビに声を掛けたのは、少し不機嫌そうにぶうつと頬を膨らませたシャルトリユー。

「ドール。キャンに謝って、ハイタカだってちゃんと謝ったよ？」

腰に手を当てながら、深海色の左眼がキツと少年を睨んだ。

その言葉にぴたりと動きを止め、ドールは先ほど一変、困った表情を浮かべる。

シャルトリユーの言葉まで無視するわけにはいかない。

理由は簡単。

嫌われたくないのだ。

「わ、わかったよ……悪かったな、パー助。お前に当てる気無かったのはホントだぜ」

口を尖らせ、ぷいと横を向くドールの謝罪は少なからず本心からだった。

「ああ、わがってら」

鼻をつまんだまま、喜屋武は唇に孤を描いた。

と、やっと收拾がつき場の雰囲気が和やかになったとき。  
実に淡々と、感情など持ち合わせていないような美しい女性の声があがった。

「秘書官……社長からの伝言を持っていらっしゃったではありませんでしたか？」

鈴の音などより何十倍も美しく紡ぐ声の主      株式会社      黒獅堂  
の受付嬢、ウルウファツエであった。

一斉に受付カウンターへ目を向ける一同。  
注目されたことにも微動だにしない麗しの受付嬢は無表情に続ける。

「可及的速やかに任務内容をエージェントに伝達してくださいと、  
獅堂社長が仰っていますわ」

よく見るとウルウファツエは内線用の受話器を耳に当てている。  
どうやら社長と繋がっているようだ……。

## Mission of Trinity【III】

「と、言うのが今回の依頼だ。各々二十四時間以内の任務内容になっている。行動は夜明けの午前四時六分からだ。では、任務完了の報告を待っている」

訛りなど微塵も感じさせず、的確に仕事内容を伝える喜屋武。どうやら鼻血はすっかり止まったようだ。

一階のロビーチェアに腰掛け、テーブルを囲んで座るシャルトリユー、ドール、スパロウハーク、そして、喜屋武。

実働エージェントではないハインファルフォはすでに席を外していた。

時刻は深夜零時を過ぎている。

通常の社員ならば帰社し、あるいはビルの中にあるプライベートルームに戻り眠っている頃だ。しかし、エージェントたちに決まった休息の時間はない。

「了解！」

「分かりました」

「……イエッサー、つかさ、俺働き詰めなんだけどな」

任務を充てられたエージェントたちは立ち上がり、それぞれ了承しうなずく。と、まあ、ドールだけはぶちぶち文句をほざいているようだ。

よいしょ、と腹を押さえて立ち上がり待機していたエレベータに乗り込む喜屋武。

一足先にロビーから去っていく秘書官を見送って、三人も疲れた体を休めるべく、各自の部屋に戻ることにした。

そう。

彼らの家は、この黒獅堂なのだ。

A M 4 : 0 6

寸分狂わずロビーの自動ドアに朝日が差し込んできた。

光に照らされる大理石の床を、入り口正面の受付カウンターから見つめる人物。

ウルウファツエ。

彼女は睡眠を摂らないのだろうか？

そんな疑問も浮かぶが、言葉と感情の少ない彼女に聞いても、ともに答えてはくれない。

と、一基のエレベーターがごうんごうん音をたて、到着音を静かな一階ロビーに響かせた。

重々しく開く二枚扉から出てきたのは、右眼に眼帯を付け、黒い外套を羽織った金髪ショートカットの少女、シャルトリューである。

「おはよ、ウル」

「おはようございます、シャルトリュー」

にこりと微笑み挨拶をするシャルトリューに対し、いつものように無表情に述べるウルウファツエ。眼帯の少女はそんな彼女の態度に、まったく気分を害している様子はない。

これが受付嬢とのあたりまえのやりとりなのだ。

そんな時、もう一基のエレベータが同じ到着音を響かせる。

中から現れたのは、長身の美青年。鳶色の髪をさらりと揺らし、朝日と同じく爽やかに微笑む。

「やあ、おはよう、シャル。おはようございます、ウルフ」

それぞれに挨拶をする、皺一つ無い整ったスーツ姿の青年、スパロウハークである。

少女と受付嬢は互いに交わした挨拶と同じく、スパロウハークに返した。

自動ドアから差し込む金色の朝日を見つめ、少女は大きく深呼吸しながら、昂ぶる感情を押さえ込む。

シャルトリューにとって、任務は刺激を満たすものでしかないのだ。

任務は「遊び」ではなく、「仕事」だと忘れぬために感情を抑制するのが常。

深呼吸を終えたとき、背後から当然のように声が掛かった。

「時間ですね。お氣をつけて行ってらっしゃいませ、シャルトリュー、スパロウハーク」

抑揚を欠いた美しい声で、美貌の受付嬢は二人のエージェントを送り出す。

「行ってくる」と底抜けに明るい笑顔を向け、シャルトリューは外套を翻し、自動ドアへと向かう。

いつもの滑りの悪い音が鳴ると同時に、火花の弾ける音。  
少女は、肉眼で確認することのできない電気の壁の中に消えて行った。

スパロウハークもまた、ゆったり微笑み外へと踏み出し　姿は  
刹那で消え失せた。

しんと静まり返った朝方の社内一階ロビー。  
ウルウファツエはカウンターの置時計を手に取り、首を傾げて見つめる。

時刻は四時十分を過ぎようとしていた。

と、カウンターの斜め後方に備わる非常階段から、けたたましい  
靴音が聞こえてきた。

革靴独特のよく響く音。

もの凄い速さで降りて来る人物がいるらしい。エレベーターを追い抜く速度である。

「だぁー！ーっ！！」

ダンツと激しい着地音を轟かせ、息を切らしながらロビーに姿を見せた人物。

どうも十数段飛ばして降りてきたようだ。

はちみつ大好きなクマのＴシャツ、その上に革ジャン、そしてブーツという、いつもの姿で登場したのはドールであった。今日は寝癖で髪が爆発しているようだ。

「やっべえ！　ウル、今何時？！　やっべえ俺遅刻じゃね？！　あ  
あもっ、シャルは？！」



相当慌てているのか、受付カウンターの前を右往左往するドールに、ウルウファツエはまたもや平板に応える。

「現在四時十分二十八秒ですわ。簡潔に述べると、遅刻。転送磁界は閉じられました。シャルトリュー、スパロウハークは定刻通り仕事に向かいましたわ」

その言葉をきちんと聞いていたのかは不明だが、完全遅刻に悲鳴を上げながら、ドールは勢いよく会社を飛び出し、自らの足で任務へ赴いた。

もうすでに手遅れかもしれないが、しかしこのままでは駄目だ……。

朝焼けを側面のボディに受けて、高速道路を走るシルバーの高級車。

その運転席で男は無言のまま唇を歪め、心に居座る靄もやに向けて呟いた。

三十代半ばの、端正な目鼻立ち。だがどこか疲れて頬がこけている様にも見える。

「藤田くん、いずれわたしはこの組織のトップになるつもりだ。その暁にはわたしのポストを藤田くんに譲ろう。だから、分かっているね？ キャリアの中でも君は実に優秀だからね」

ハンドルを握る男 藤田の隣で白髪交じりの、品の良さそうな

中年男性が微笑んだ。

細身ではあるが、どこことなく街に行く一般的なサラリーマンとは雰囲気が異なっている。

そんな穏やかな表情と裏腹に、眼鏡の奥の瞳が狡猾な光を帯びていた。

まるで、獲物を睨む蛇のような。

男は続ける。

「確か、君には小学生くらいの息子がいるんだっただね、なら尚更、このエリートとして歩んできたレールを外れるわけにはいかないねえ」

男の言葉は、意味深に響いた。

「ええ、分かっている、つもりです。……松本副総監」

藤田は努めて冷静に、答えを返す。

助手席で白髪交じりの男、松本副総監は満足そうに唇の端を持ち上げ、革張りのシートに深くもたれた。

## Mission of Trinity【IV】

この国の秩序を支える巨大組織　日本帝国警察庁、その傘下で  
ある警視庁本部。

それぞれの部署が慌しさを増してきた、朝の時間帯。  
繁忙を破る声があがる。

「ジャック・マクレガー捜査官だ。ネオヨークシティ警察からわ  
が庁に本日付で視察兼研修にやって来た。担当は総務課、宜しく頼  
むぞ」

日本帝国警視庁本部、組織犯罪対策部が置かれるフロアに少し大  
きめの声が響いた。

濃紺の制服を着た職員達が、仕事の手を休めて正面に立つ人物を  
見つめる。

男性警察官の隣で、長身の若い男が礼儀正しく頭を下げた。  
スーツに映える新緑の瞳、さらりと動く鳶色の髪、そしてなによ  
りも、美しい。

「ハジメマシテ、色々メーカーをおかけスル所存と思いますが、ド  
ウゾ宜しくお願いシマス」

ネイティブではないが、聞き取れなくもないこの国の言語。  
マクレガー捜査官はにこりと微笑んだ。

紹介も終わり、組織犯罪対策部は再び繁忙が訪れる

「皆サン、仕事熱心デスね」

「そうかい？ 毎日こんな感じだよ」

そんな会話を交わしながら、警視庁内の廊下を並んで歩く二人。マクレガー捜査官は、感心したように目を丸め、隣を歩く庶務の警察官へ話を振った。

面倒事を押し付けられた警察官は苦笑いを浮かべて受け流すだけだが。

それもそのはず、自分達の仕事で手一杯に加え、他国の警察官の面倒をみるなど……。

「じゃあ、今日は本部内を見学していただきます。パスを首に下げていれば問題ありませんから。それでは自分はこれで」

丁度左手に階段が見え、警察官はにっこり微笑み『あとはご自由に』と言い残して左に折れてあつという間に降って行った。

「ずいぶん適当な……まあ、こつちとしては好都合だけど」

呆れの混じった短い嘆息を吐き出し、マクレガーは一人歩き出す。

一方。

「ちょ、痛いんだけどつ、ヤダ、離してよっ！」

「暴れるな、コラッ、早く腰に下げてるモノをよこしなさい」

同建物内に置かれる生活課のフロアで、朝から騒がしい小事件が起こっていた。

警察官が逃げ腰の少女の腕を掴み、逃がすまいと必死に格闘している。

他の職員達は珍しくもないやり取りに、今日ばかりは目を丸くして見つめていた。

右眼に眼帯、金髪、そして膝下まで隠れる黒い外套。

そんないでたちの不審人物をこの警視庁内で発見し、話を聞こうと警官が声をかけたとき。

振り向いた少女の外套から日本刀が見えたのだ。

そして、現在にいたる。

警官が少女の黒い外套を剥はごうと、手をかけたとき、彼女が右手にげんこつを握っていたとは知らなかった。

「マントの下に日本刀を所持しているだろう？！早くよこしなさいーっ！」

「あたしの菊丸と椿丸よつ、触らないでよ、ボゲエツー！」

少女の右フックが見事警官の左頬を直撃し、三メートルほど吹っ飛ばされた時にはもう、警官の意識は無かった。

堪忍袋の緒が切れ、興奮していた少女がふと我に返ったとき、周囲にいた生活課の職員達が一斉に飛びかかって来たのだった。

体力に自信のある職員達に押さえ込まれ、少女は職務強要罪であつさり現行犯逮捕となつてしまった。

両手にかけられる強固な錠。

拘束された少女は後ろ手に手錠をかけられ、ぶうと頬をめいっばい膨らまし、職員に両脇を掴まれ、生活課と同じ階にある取調室に

移動した。

取調室のドアを開けると、中はほんのり不気味に仄暗い<sup>ほのぐら</sup>。

狭い部屋で簡素なパイプ椅子に座らされ、少女は険しい目つきのまま、口を開こうとはしない。

「君、名前は？」

「住所は？」

「歳は？」

「どこの国籍だ？」

「日本帝国人には見えないが、日帝語ペラペラじゃないか」

「この刀、本物のようだけど」

二人の警官に詰問され、頑なにだんまりを決め込んでいた少女。しかし、警官の一人が少女から取り上げた二振りの和刀を鞘から抜こうとしたとき。

「やつ！ 触らないでよ！ 垢付くでしょっ！！ ってか、返せー  
ーっ！」

耳にキンキン響く大音声が生活課のさほど広くないフロアにこだました。

その取調べ室の前をマクレガー捜査官は、丁度のんびり通過している最中だった。

どうも聞きなれた声が聞こえるな、と考えながらも目的の人物がいる階を目指して歩みを止めることはなかったが。

地上十八階建ての巨大ビル、帝国警視庁本部。

人が米粒よりも小さく、周囲の街並みが見渡せる上層階　現在  
使用されていない第十七会議室の窓から地上を見つめる人物がいた。  
後で指を組み、制服姿は品格に富んでいる。

松本副総監、その人だ。

「藤田くん、今夜例のホテルで黒岩と会うことになったんだ。君は  
まだ会ったことがなかっただろう？　一緒に来たまえ」

外を見つめながら、松本副総監は窓越しに映る藤田に向けて言う。

「自分も、ですか？」

決して嫌な表情を見せず、淡々と聞き返す藤田。

端正な顔はやはり疲労が滲んでいるように感じるが、松本副総監  
は労わりの言葉一つもない。

「組を束ねる人物だよ。わたしも色々世話になっているしね、もう  
そろそろ君のことを紹介してもいい頃だと思うのだよ」

穏やかに目を細めるも、松本副総監の言葉は否定を許さぬ権力の  
濫用に近い。

「……では、ご一緒させていただきます」

胸の中に沸き起こる言葉を噛み殺し、藤田は保身の言葉を選んだ。  
この副総監に従わなかった部下が地方へ飛ばされたのを何度見て  
きたか。

藤田はキャリアとして歩んできた道のりを、捨てることができず  
にいるのだ。

「ふふ、それでいいんだよ」

上品な笑みを浮かべ、副総監は晴天の空を見上げる。

同じ部屋で会話を交わす二人の視線が合うことはなかった。

そんな時。

ノックの無いまま、会議室のドアがガチャリと開いた



## Mission of Trinity【V】

驚いて振り向く藤田が見たものは、見たことも無い外人。  
鳶色の髪と緑の目、スーツ姿の若い男　マクレガー捜査官である。

「誰だ、きみは？」

身を構えて訝しげに問う藤田に、マクレガーはやんわりと微笑んだ。

「マツモト副総監、フジタ参事官。日本帝国随一ノ権力を誇る黒岩組、つまり、暴力団の組頭とお会いにナルのでしょうか？　ぜひ同行させていただきたいのデスガ」

この建物内では避けたい単語をつらつら述べる見知らぬ男に、二人の表情は一気に凍りついた。

「な、なんだと……?!」

松本副総監が喉から絞り出せた言葉はそんなつまらない台詞。

「某有名ホテルの地下層に法律の目ヲかいくぐって存在スル違法力ジノ……」

何もかもが真実で、組織犯罪対策部の人間でさえ知らぬことを、この男は知っている。

何が目的だ。我々を強請<sup>ゆす</sup>るつもりか。

そう切り出そうと藤田が口を開こうとしたとき、「彼のことはよ

く知っているものデ」      そんな答えが返ってきた。

茜の空が広がりつつある夕暮れ。

今まで不気味な静けさが漂っていた取調室に、短い悲鳴があがった。

「いない！」

今まで不審者である少女の取調べを行っていた警官が、顎をさすりながら狭い室内を見回す。床には白目を剥いて倒れる同僚が転がっている。

一体どうなっているんだ？

混乱する頭で必死に今までのことを思い起こした。

彼の覚えていることは、この部屋で黙秘を続ける不思議な少女とにらみ合いを続け、所持していた二振りの刀剣を一時保管のために持ち出そうと、座っていたパイプ椅子から立ち上がった      そこまでだ。

顎に走る激痛に悩まされ昏倒する同僚をまたいで部屋のドアノブを回した。

が、ドアが開くことはなく。

目を点にしながら、内側に閉じ込められた警官は呆然と立ちすくんだ。

取調室の扉外側にはドアノブが付いていない。  
そこには一枚の紙が貼られているだけだった。

『現在故障中　別室を使用してください』

刑事総務課』

あまり上手とはいえない字で書かれたそれは、取調室から脱走した少女が貼ったものだった。

同時刻。

少し早めに警視庁を出てきた松本副總監、藤田参事官。シルバーの車で向かう先は都内でも一流の人間達がこぞって集まる有名ホテル。毎日様々な催しが開かれるそこは、一流の人間のステータスとなっていた。

地下駐車場に車を止めると、後をぴったり付いてきた黒のスポーツカーも停車する。

「なかなかいい車に乗ってるじゃないか、マクレガーくん」

上品な物腰のおかげで、到底嫌味には聞こえない。

先に降りていた松本副總監が車を降りたマクレガー捜査官に言う。

「恐縮デス」

松本副總監に劣らず上品に微笑むマクレガー。

しかし、藤田だけは内心、この突然現れたネオヨークシティから視察兼研修で派遣された男に不安を感じていた。

「まさか君も黒岩さんと知り合いだとはね。まあ今夜はたっぷり楽

しむといいさ」

「本当は単独で行っても良かったのデスガ、お二人も今夜行かれるとたまたま聞いたので、一緒にどうかと思いました」

地下駐車場に備わるエレベータの中で、スーツ姿の松本とマクレガーはにこやかに語らっていた。

その後姿を、藤田は浮かない表情で見つめる。

エレベータの降下に伴う不快感、それも藤田の表情を曇らす一因の一つだ。

チン、と機械的な音がやつと響き、目的の階にたどり着いたようだ。

松本がエレベータに乗り込んだ際押した四つのボタン。それが法律の目が届かない隠された賭博場への、鍵。

ゆっくり開く扉の向こう側に、藤田はラスベガスを見ている気がした。

派手な衣装を身にまとう淑女、スーツ姿の紳士。

コインの擦れ合う音、カードをきる音、VIP達の賑やかな声。

邪魔にならないBGMと天井から注がれる数多の照明。

ルーレット、カード、ダイス、スロット、キノ……世界のあらゆるゲーム凝縮されているようだ。

それら全てが人の心に高揚感をもたらす。

この国では違法となる、カジノがそこにあった。

藤田があっけに取られていると、先行く松本が早くと急かす。

人ごみの中を掻き分け、フロアの奥へと進んで行くと、突き当たりの壁、その角際に鉄扉がはめ込まれている。

鉄扉の前で松本が、やっと追いついて来た藤田に尋ねた。

「おや、マクレガーくんは一緒じゃないのかい？ はぐれたか……まあ、彼はここのことも知っているだろうし、大丈夫だとは思うが」

気にも留めず、松本は硬い扉を三度拳で叩くと、中からガチャリと鍵が開き、重々しく扉が開く。

中へ入る松本に続き、藤田が恐る恐る足を踏み出したとき。

「大丈夫、全てはあなたの望むようになる」

カジノ特有の様々な音が飛び交う中、背後からはつきりと、ネイティブな発音が聞こえた。

その声には聞き覚えがあつたのだ。少し首を回して背面に目をやる。

「……マクレガー捜査官……？」

しかし、彼の姿はない。

## Mission of Trinity【VI】

少し時間を置いて、藤田が鉄扉の中へ踏み込むと、思ったよりも狭い室内に驚いた。

暗い室内に小さな照明が二つ、天井から仄かな光を放っている。

二人掛けのソファアがガラスのテーブルを挟んで一対。

あとは床に分厚い絨毯が敷かれている以外、家具はない。

横に視線を走らせると、黒髪をオールバックに纏め、黒服を着た、威めしい男三人が壁際に屹立している。

視線を正面に戻すと、目の前の白い皮製のソファアに腰をかける、松本と同年ほどの男が。その男は藤田を一瞥するも、再び向かいに座る松本に目をやった。

「で、先ほどの続きだが……今度の力りはでけらしいな、いつも通りウチんとこの本サロは抜いといってくれや、松本サン」

両腕を広げてソファアの中央に悠々座り、不敵な笑みを浮かべるのは、何度も資料で見てきた男。

浅黒い肌に短く刈り込んだ頭部、柄物のワイシャツの上からでもガタイのよさが分かる。

一見すると熊のような男であるが、二つの眼窩がんかに鋭く光るそれは熊そのものだ。

藤田がごくりと唾を飲み込んだとき、松本が口を開く。

「ええ、もちろんですよ、黒岩組長。このカジノほどではないが、あの風俗店もなかなか稼いでますしね」

「ハッハッ、こりゃあ流しの率を少し上げんといきませんなあ」

品よく微笑む松本に対し、暴力団の組長、黒岩は豪快に肩を揺らした。

二人の関係は長年続く警察と暴力団の癒着。藤田はとづくに知っていたが、改めて背筋がぞつとする。

たったこれだけの短い会話で荒廃した組織が浮き彫りになる。

嫌悪感に襲われ、藤田が一步後退した、その瞬間。部屋のドアに何かが叩きつけられたような、鈍い音が響く。

部屋全体は防音になっており、カジノの様子は分からない。何事かと、黒岩の部下達は首を傾げて鉄扉を押し開けた。

カジノに広がる異常な光景。

小部屋の男達は驚愕に目を剥いた

あれほど賑わっていたフロアに客の姿はなく、コインやカードが散乱し、ガラスの破片などが床に散らばる。バックに流れていた音楽も止まり、響いていたのは銃声と雄たけびのみ。

所々、天井の照明も壊れて室内は明るさが半減している。

連続する銃声。

カジノを運営する暴力団幹部とその舎弟達数人が、ルーレットが置かれるテーブルの少し上をめがけて発砲。

しかし銃弾が対象に当たっていないと分かったときには、もう遅い。

飛来する銃弾を跳躍してかわすそれは、ふわりと宙に舞った。

天井の照明に照らされて、その影がはっきりと正体を現す。

「ブアーカ、当たるわけないでしょ」

ショートカットの金髪が人工の光に当てられ、妖しく輝く。

右眼の眼帯が見る者に威圧感を与え、深海色の左眼が心臓を凍らす。

それは異邦の少女。

彼女の全身を纏う黒の外套がばさりと背後に流れ、華奢な身体に組員たちは息を呑んだ。

そして、彼女の腰に下げられた二振りの和刀を見つけたとき、彼らの視界は暗転する。

二振りの和刀は空中で抜刀され、重力に逆らって浮いた体は急速に地面を指す。

狂気の刃<sup>やいば</sup>ではなく、あえて峰を向けた。殺すつもりはないらしい。組員達は言葉を発することも許されずに、次々骨の碎ける鈍い音をたてて床と口付けを果たす。

少女にとって、「殺し」よりも「遊び」の方がスリルに満ちているのだ。

そして、最後の組員が床へと崩れ落ちた。

カチャリ。

狂気が鞘におさまる不気味な響きだけが、フロアに余韻を残す。

少し離れた距離で、藤田、松本、黒岩、部下達が呆然と見つめていた。

たった一人、フロアの中心に立つ少女に呆気にとられたのだ。

黒岩の側近である黒服の三人が、竦んでしまった心臓を奮い立たせ、各々短刀、拳銃、警棒を手にして駆け出す。



「このガキがあッ！！」

黒服の一人が雄叫び、先に発砲。

乾いた音が耳を劈くと同時に、床を蹴る革靴の音が響いた。

拳銃を持つ男の前に一瞬で移動した少女、身を低く構え、懷に潜り込むと掌を一気に突き上げ、男の顎を砕く。

短く息を吐き出し、腰を回転、もう一人の黒服が背後から短刀を両手に構えて突進してきたのを余裕でかわすと、男の首根っこを掴み取り、仰向けに引き倒すと容赦なく男の腹部にひざを落とした。

ぐほつと嗚咽を漏らしながら、意識を絶たれる。

華奢な少女に、どうしてこれほどまでの力を出せるか、人間とは思えぬ身のこなしだ。

とうとう最後の一人になってしまった黒服の男は、警棒を持つ己の手が震えていることに気付く。

頭の中で少女の正体が怪物か、化け物のどちらかとくだらぬ論議をしているうち、目の前に降り立つ影があった。

それが少女だと気付くときには、顔面にブーツの底が映っていたのだ。

藤田達が立ちすくんでいる小部屋の壁に、黒服の男が勢いよく吹っ飛んできた。

けたたましい音をあげ、ドサリと床に叩き落ちる体。

衝撃で凹んだ壁から、コンクリート片がパラパラ男の頭へ降りかかる……。

その光景を目の当たりにし、松本は目を泳がせ恐怖に駆られてわ

れ先にと、フロアの隅に備わった別な扉をこじ開ける。非常階段である。

「ひゃああああっ」

普段からは想像できぬ情けない叫び声をあげて、松本は階段を昇っていった。

残された藤田は足が思うように動かず、その場に留まった。黒岩も同じような理由だろう、沈黙したまま動こうとしない。

「あーあ、疲れたあ。これで大体あたしの仕事は終わりか、あとは」

## Mission of Trinity【VII】

少女が外套の乱れをきちんと直し、独り言を呟くとふいと未だ佇立する二人を見つめた。

「藤田サン、くみちよーサン、安全な場所まで送るから付いてきて」

少し離れた場所からでも分かる、少女の明るい声調。

先ほどまで感じていた鬼神の如き圧迫が、今の彼女からは感じられない。

藤田と黒岩は異常な光景に肝を潰しながらも、少女に従い、ゆっくり踏み出した。

一方、非常階段を駆け上がる松本は五十四歳という年齢に体が悲鳴を上げている。ひいひい喘ぎながら、なんとか一段一段足を上げて進むも、地上はまだまだ果てしなかった。

そんな時、上からごっん、ごっんと階段を降る足音が聞こえる。

革靴の、重たい響き。

思わず身をよじる松本は、目の前に現れた人物に目を剥いた。

「ふ、はは、は。……な、なんだ、子供か」

そう、年頃十六、七ほどのこども。

頬を引き攣らせたまま、吐き捨てるように呟いた。何かよからぬ者が現れるのではないかと、心の中で怯え、震えていたが、目の前に現れた人物をみて、心の底から安堵する。

松本を見下ろす形で現れたのは、先ほどの少女とかわらぬ年齢の少年。

緋色の髪のもと、整った顔立ちにはどこかひやかで。

「アンタさ、最近調子ノリすぎだつて。派手にやりすぎ。だから、お仕置き喰らうんだぜ？」

ふっと目を細める少年は、他人はもちろん、年上への遠慮がないようだ。

「なつ、なんだと……?!」

「アンタだけ地下の賭博場に戻ってもらうぜえー」

少年は、唇を歪めたあと、両手を組んでボキボキ骨を鳴らす

迫り来る闇夜に茜色の空が濃さを増してきた頃。

人々が賑わう街の中心。

そんな中に存在する有名ホテル。その外周にサイレンを響かせ、赤色灯をまわす白黒ツートンカラーの車が何台も停車し、その中の数台に赤い十字マークをつけた白い大型の車も見えた。

野次馬が群がる中、ホテルから担架に乗せられた者が次々と運び出され、白い大型車に収容されてゆく。

目的地は、病院。

その後も赤い十字マークの車は忙しなく、何度もホテルと病院を往復するのだ。

かなりの時間を要して、最後の一人が担架に運ばれて出てきた。顔中ボコボコで、身元が分からない。

息はあるものの、口から泡を噴いて意識を失っていた。

白髪交じりの髪その人物は、おそらく松本副総監であろう。

ひどく疲れた表情で、わが家のドアを開けて、のそりと玄関へ崩れこむのは、藤田だった。

物音に反応して、リビングの扉が勢いよく開く。

「パパー、おかえりなさい！」

弾んだ声は九歳になる息子の優一。

嬉しそうに背中に抱きつく、頬を摺り寄せてくる。

「お帰りなさい、あなた。今日はずいぶん早かったのね、珍しいこともあるのね」

エプロン姿の美しい妻もまた、嬉しそうに夫の帰宅を喜んだ。

「あのね、僕きのうなんでもお願いをかなえてくれるところをお願いしたの！」

精神的に疲れている今日に限って、やけに騒がしい優一にうんざりしながら、藤田はなんとか表情を作って相槌を打つ。

「うん？　お願い？」

「そう、僕ねえ今日はパパのたんじょうびだから、パパがはやく帰ってきますようにってえらい人にたのんだの。いらしたんだよ、おかねもはらったんだよ」

妙なことを言い出す息子に、少し困って藤田は妻に視線を送る。  
妻は察して付け加えた。

「優一ったら、昨日からこれしか言わないの。なんでも願いを叶えてくれるビルがあつて、そこにお金を払って『依頼』したんですつて。ちゃんと契約書まであるのよ、手の込んだ遊びよね」

妻は、嬉しそうに父にしがみつく息子を微笑ましく見つめながら、エプロンのポケットから折りたたんだ紙を取り出し、藤田に手渡した。

藤田がそれを開くと、紙には間違いなく契約書と書いてある。

タイピングされた文字の内容は、契約に関する注意事項が細かく書かれ、その下に契約内容があつた。

日本帝国警視庁 参事官 藤田敬一郎の早期帰宅。 指定日は契約期日の翌日。 帰宅時間は午後六時とする。 依頼料領収945円  
ン

藤田は玄関のサイドボードにちよんと置かれた小さな時計を見る。時刻は午後六時三分…… 帰宅したのは丁度六時ということになるな、ふとそんなことをぼんやり考えた。

「そうか、優一がパパを早く家に帰れるよう、お願いしてくれたのか……」

再び息子に視線を戻してぼつりと言った。

「うん！ だってずっとパパと会ってなくてさびしかったんだもん

「！」

言って、息子は藤田の背中に顔を埋める。

「ごめんな、ありがとう」

藤田は優一を向かい合うように座らせ、優しく抱きしめた。  
父親に戻り、やっと微笑むことができたのだ

翌日の早朝。まだ東の空には燃ゆる光は昇っておらず、藍色が空を覆っている。

昨日夕方有名ホテルで起こった事件は、マスコミのいい餌となっていた。

朝刊紙面で大々的に報じられた「某有名ホテルの地下で運営されていた暴力団組織の違法カジノ摘発。警視庁の官僚が手を組み、違法行為に協力」の内容に、警察組織全体は揺らいでいた。

朝一番で届いた新聞を片手に、帝国警察組織のトップ、警察庁長官の織田はやれやれ、と嘆息を漏らす。

白髪の、濃紺の制服を着ていなければどこにでもいる老人だ。

誰もいない長官室のデスクにぱさりと新聞を置いたとき、胸ポケットの携帯電話が震えた。

## Mission of Trinity【VIII】

非通知の表示に、躊躇<sup>ためら</sup>うことなく通話ボタンを押す。

「……ああ、黒岩くんか。今回の件は済まなかったね、君の幹部達十数人には可哀相なことをしたが、これも我々の均衡を保つためだ。松本は仕方ない、派手にやっていたのだからな。あれではいずれ内部に漏れてしまう。……ああ、分かってくれるとは思っていたが、事前に言わずに申し訳なかった。契約内容の免責事由だったんだよ。だがこれで一つ癌を切り取れた。……ああ、今度そちらで事が生じたら、わたしの方から手助けさせてもらうよ、では、体を大事にしてくれ」

相手と話し終わると、折りたたみ式の携帯電話閉じて、再び胸ポケットへそつと戻した。

そんなとき、織田長官の横から突然軽い口調の声が上がる。

「これで依頼は終了。織田サンの依頼通りの結果になったと思うけど、どーだい、満足してくれたかよ？」

広い長官室の扉の前で、一人の少年がにやりと笑みを浮かべた。その黒瞳は決して笑ってはいないのだが。

一体いつ部屋に入ってきたのか？

一体どうやってこの部屋に入れたというのか？

一体何者か……だが大体の想像はついていた。

「君は？ 厄事請負士、諜報代理士、それとも仕置請負士かね？」



不審者にさして驚きもせず、長官は小首を傾げて尋ねた。

「三番。俺、ドールってんだ。で、どーなの、二億払ってもらったんだからさあ、満足いかなかった。って言われるとやべーワケ、俺」

礼儀知らずの発言にも、長官は動じる気配がない。  
むしろ友好的に、柔和な笑みを向けるくらいだ。

「やあドール。もちろん満足だとも。これで表向きには我々組織とマルボウの癒着は消滅したことになる。黒岩のこともうまく逃してくれたしね。まだまだ若い参事官に共倒れになって欲しくはなかったからね、それに悩んでいたようだし。わたしと黒岩との関係に変化なくことが収まったのだ、素晴らしい結果だよ。さすがは名高い企業だ、君達のような優秀な人材を保有しているのだからね」

長々と語り、今回の依頼人である日本帝国警察庁、最高権力者である織田長官は少し厚めのオフィスチェアに深くもたれかかった。

「ははっ、そりゃーこっちとしても嬉しいね、じゃ、そろそろ行くわ……あ、そうそう」

悪戯っぽく唇の端を持ち上げると、ドールは思い出したように革ジャンの胸ポケットをまさぐった。

「はいよ、アンタが欲しがってたユチャク現場とやらの、松本の肉声テープ」

ポケットから取り出したライターそっくりの盗聴器。

マクレガー捜査官　スパロウハークが藤田へ最後に声をかけた、あの時密かにポケットに忍ばせていたのだ。

地下の賭博場に捜査が入る前、逃走の手助けをした少女　シャ  
ルトリユーが藤田から回収し、ドールへと渡った。

それを、ぼんと織田長官へ投げつける。

孤を描いて落ちてきたテープを手の内に納めると、満足げに長官  
はじつと見つめた。

「そんなん、何に使うんだよ」

「危険因子である松本の社会的抹消と、罪を全てその松本に被せ、  
組織の信頼回復を少しでも早めるために……有効にね」

悪びれもなく言つてのける、食えない爺さん。

片眉をあげて、ドールは苦笑した。

警察組織の頂点に立つ人物へ、じゃーな、と別れの挨拶を述べて、  
少年は長官室の扉を開けた。

ぱたんと音をたてて閉まる扉を見つめる織田長官。

皮靴独特の重たい響きが三步だけ聞こえた後、音と一緒に、気配  
が消えた。

時刻は午前四時六分。

丁度朝焼けの射し込む自動ドア。

一階のエントランスロビーはまばゆい光に満ちていた。

その自動ドアが滑りの悪い音をたてて、ゆっくり開口する。

自動ドアをくぐり、ごっん、ごっん、と厚い皮底特有の重たい音  
がロビー内で不規則に響いた。

「お疲れ様でした、ドール」

受付カウンターから平板かつ鈴の音よりも美しい声が聞こえた。  
美貌の受付嬢が無表情に出迎え、ドールは、おう、と片手をあげる。

目線をふと横に走らせ、ロビーチェアーに座る三人と交わる視線。

「おかえり、ドール」

それぞれが一番最後に帰社した同僚に声をかけた。

その中に、まぶしいほどキュートな笑顔を見つけてドールの表情がほころぶ。

恋心を抱く少女に両手を広げ、抱擁を求めて駆け寄ったとき。

「たっだいま シャルトリユー、おかえりのハグを俺に頂だうばおっ」

シャルトリユーにたどり着く直前、視界の横から突き出てきた腕がドールの首にモロで入ったのだ。丁度リアットをかまされた態勢である。

「別に君は帰ってこなくてもよかったんですよ、社内の風紀が乱れるだけです」

衝撃にどたりと仰向けに倒れる恋敵を見下ろして、腕を伸ばした張本人、スパロウハークが淡々と述べた。

頭をしたたか打って悶絶するドールが復活すれば、間違いなく乱闘となるだろう。

今まで座っていた眠たそうな表情の、栗毛の青年      ハイソファ  
ルフォは慌てて先に言葉を挟んだ。

「ここらこら、社内で喧嘩はしないでよ。仕置統括課課長の俺が怒られつしょ？」

「あははーガンバレーハル」

課長にしては威厳のない口調でハインフルフォが言うと、自分は関係ないと言った風にシャルトリューが激励を飛ばすのだった。

のんびりした時間が、早朝に流れた。

その四時間後。

警視庁に見知らぬ外人が一人現れ、組織犯罪対策部にひょっこり顔を覗かせた。

中年太りした、スーツ姿の金髪男性。

職員の一人が不審に思って声をかける。

「あのーどちらさま？ 警察関係者以外立ち入り禁止ですよ」

睨みを利かせながら迫る男性職員に、メタボ気味の外人は身振り手振りを交えて語る。

「It came from the neo york City  
Police. My name is Jack McGre  
gor.

Though it loses one's way and  
it put it away after a delay o

f a d a y .  
r

どうも本人曰く、ジャック・マクレガーと名乗っているようだ。  
そういえば、今日はあの若い捜査官の姿が見えないのはなぜだろう、と職員は首を捻った。

**M i s s i o n   o f   T r i n i t y   V I I I   】   (後書き)**

作中で使用している隠語

カリ：一斉検挙

マルボウ：暴力団

本サ口：…か、割愛で（汗

## エピソード

「警察庁長官 織田氏から2億イエン、藤田参事官の子息、藤田優一氏からの945イエン。総額2億とんで945イエン……三人のエージェントを派遣した割りに、あまり実のない収益ですね」

社長室の壁際で、鳥の巣に似た黒髪の男が薄っぺらいバインダー片手にぼやいた。

社長室には到底似合わないアロハシャツを着用した社長秘書官は、ふうとため息を吐き出す。

「今現在の藤田優一氏にはその金額が妥当でしょう。しかるべき未来の大物になるであろう人物に、わが社の名前を覚えてもらったという、素晴らしい実績を残したのですから」

革張りの椅子に座るのは、十二、三歳ほどの少年。全身黒ずくめの少年は、ふっと唇に孤を描く。

「警察庁長官からの依頼が丁度よく入ってきたお陰で、スムーズに事が運びましたし」

言って、少年は窓から消えゆく夜を見上げた。  
まもなく朝がやってくる。

「外の世界は実に面白い、そう思いませんか？」  
「……そうですね、欲望と至純に満ちた地上は他人の世界。自分も、そのとおりだと思います。」

壁際で、秘書官は視線をのろのろ窓へと向ける。

上機嫌の社長をよそに、どこか憂いを秘めた瞳を浮かべていた。

「おや、仕置請負士が戻って来たようですね……四時六分……帰社時刻には間に合ったようですね」

ふと、社長が目線を下に向け、会社の入り口に現れたエージェントを見つける。

「あ、社長、その仕置請負士ですが」

「出社時刻は、遅刻でしたね。あとで会計士の方に連絡をつけて給料から天引きするようにと」

先になんとか遅刻の件をとりなしてやろうと切り出したとき、すかさず社長が斬り捨てた。

乾いた笑いで厳しいな、と内心同情する秘書官。

「どうにも遅刻癖が直らないようですね」

「ふふつ、彼の場合、昔からああなんですよ」

怒る様子もなく、むしろ楽しげに声を弾ませる社長。

そんな穏やかな表情につられたように、社長秘書は目を細めた。

「では私は彼らの元へ顔を出しに行って参ります。失礼します、獅堂社長」

「ご苦勞様、喜屋武」

恭しく一礼し、一步後退。

丁寧に社長室から出て行く己が秘書を微笑ましげに見つめ、少年



株式会社 黒獅堂の社長である獅堂は椅子に深く腰をかけた。

善意のご依頼も、悪意のご依頼も、弊社は隔てなくお受けいたします。

弊社はどんなご依頼も承る優良企業

株式会社 黒獅堂へまたのご依頼、お待ちしております  
おります

## エピソード（後書き）

《了》

拙作に最後までお付き合いくださり、ありがとうございました。  
心より感謝いたします。 黒雛

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4335e/>

---

株式会社 黒獅堂

2010年10月10日06時10分発行